

(様式1)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	山口県	番号	8
-------	-----	----	---

推進地区名	推進校名	児童生徒数
宇部市	見初小学校	115
宇部市	神原中学校	211
下関市	安岡小学校	692
下関市	安岡中学校	362

○ 調査研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 「4つの重点取組事項」の一層の推進



これまで本県で推進してきた「4つの重点取組事項」である学校の組織的な取組、指導方法の工夫改善、学習環境の整備、学習習慣の確立を一層推進するとともに、以下の3点について、重点的に取り組んできた。

- 4月の全国学力・学習状況調査と10月に全県一斉に実施した学力定着状況確認問題により、各学校における課題解決に向けた指導の工夫改善等の取組の充実を図る年2回の検証改善サイクルを確立した。
- これまでの学力調査等の結果を踏まえて、課題改善に向け、県内すべての学校を参加対象とした国語、算数・数学の研究協議会を開催するとともに、県内全7地域において授業づくり研修会を開催し、教員の指導力の底上げを図った。
- 2市4校の推進校において、小中連携を柱とした実践研究を行い、成果発表会等により成果の普及を図った。

(2) 取組概要について

時期	推進地域における取組	推進地区・推進校における取組
4月	○調査研究計画の確認	○H24までの課題解決に基づく取組
5月	○活用する力を高める研究協議会の開催 4つの重点取組事項の推進	○各地区の実態に応じた取組の推進
6月	○県市町学力向上担当者会議の開催	
7月	○「やまぐち学習支援プログラム」 評価問題、基本問題、教材の活用促進	○推進校のテーマに基づく取組の推進
8月	○調査研究推進校等研究協議会の開催	○推進地区教委による継続的な支援
9月	9/18宇部市立神原中学校訪問	☆神原中学校授業公開
10月	○授業づくり拠点校研修会の開催（県内35校） 10/8宇部市立見初小学校訪問 ○山口県学力定着状況確認問題の実施	☆見初小学校授業公開
11月	11/15下関市立安岡中学校訪問 11/20下関市立安岡小学校訪問	☆安岡中学校授業公開 ☆安岡小学校授業公開
12月	○学力向上推進協議会の開催	○中間まとめ（発表）
1月	1/16宇部市立神原中学校訪問 1/31下関市立安岡小学校訪問	☆見初小・神原中成果発表会 ☆安岡小・安岡中成果発表会
2月	○2/17成果報告会の開催	○調査研究のまとめ
3月	① 研究のまとめ作成 ○ 各学校の取組状況のWeb公開	○ 研究のまとめ作成

2. 推進地区における取組

(1) 下関地区における主な取組

- ① 検証改善サイクルの確立，学力向上プラン等を活用した学力向上の取組の推進
 - ・ 全国学力・学習状況調査及び下関市学力調査（小学校5年生，中学校2年生対象）による現状及び課題把握と学力向上プランの作成
 - ・ 山口県学力定着状況確認問題（小学校3年生～6年生，中学校1・2年生対象）による取組の評価と改善状況の検証，学力向上プランの見直し
 - ・ やまぐち学習支援プログラムを活用した定着状況の細かな確認

② 教職員の指導力の向上

- ・ 「校内研修活性化へのチャレンジ」，「互見授業のススメ」を活用した全校体制による開かれた校内研修の推進
- ・ 研修支援訪問や学校からの要請訪問によるワークショップ型等の校内研修の充実
- ・ 「下関スタンダード授業の基礎・基本」で示した3つの視点（Ⅰ子どもの実態を踏まえた授業 Ⅱかかわり合いのある授業 Ⅲ見通しと振り返り（評価）のある授業）を意識した授業改善
- ・ 中核市研修，自主研修「わくわく教師塾 in 下関」による指導力の向上

③ 組織力の向上

- ・ 学校運営協議会，校種間連携の推進
- ・ 学力課題である活用する力の育成を図る「学力向上部会」，小学校における学びを中学校へつなぐ「小中一貫教育部会」，地域の歴史を学び，ふるさとを誇りに思う心を育てる「歴史部会」の3部会を設置した「新しい学校づくり推進委員会」の開催

(2) 宇部地区における主な取組

- ① 教職員相互の「学び合い」を重視した校内研修の活性化と教員の資質能力の向上
 - ・ 全教職員による一人一授業公開の実施，日常的に教師同士が授業を見せ合う「開かれた教室」の推進
- ② 言語活動の充実による思考力・判断力・表現力等を培うための授業づくりの推進
 - ・ やまぐち学習支援プログラムの教育課程への位置付け
 - ・ やまぐち学習支援プログラム評価問題等の実施と事後指導の充実
- ③ 義務教育9年間を見通した指導の充実による学力向上
 - ・ 全国学力・学習状況調査や全国標準学力検査（小学校5年，中学校1年）の実施による児童生徒の学力傾向の把握
 - ・ 小中合同研修主任会における中学校区の課題の明確化，改善策の検討
- ④ 家庭と連携した学習習慣の確立
 - ・ 学力調査等の結果分析等から見いだした課題克服に向けた家庭学習プリント（基本問題プリント，やまぐちっ子学習プリント）の計画的な活用

3. 推進校における取組

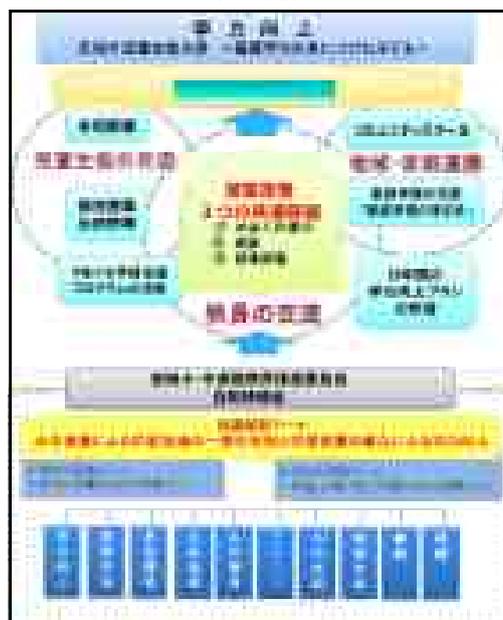
(1) 下関市立安岡小学校の取組

- ①児童生徒や教員の交流，9年間を見通した教育課程の編成などによる小中連携
- ②研修主題「確かな学力を培う学習指導の工夫～基礎学力の定着をめざして～」による校内研修と，「書く力・読む力」を中心とした基礎・基本の確実な習得と定着
- ③学校応援団による学習支援，読書支援活動など，コミュニティ・スクールによる地域と協働した学習支援
- ④「家庭学習のススメ」，「家庭学習の手引き」による家庭と連携した家庭学習習慣の改善

(2) 下関市立安岡中学校の取組

- ①学力向上プランの工夫改善，家庭学習の手引きの作成，授業改善のための3つの取組，児童生徒や教員の交流などによる小中連携
- ②「ねらい」と「振り返り」の明示，見通しのある授業の展開，ワークショップ型研修等による授業改善
- ③朝学習の導入，自学自習教室の開設・質問教室の実施，掲示物の工夫等による学習習慣の定着と意欲化
- ④家庭学習の手引きの作成，学習支援ボランティアによる質問教室の実施，体験活動の充実など，学力向上の基盤づくりのための家庭・地域との連携

安岡小・中学校連携イメージ図



(3) 宇部市立見初小学校

- ①全国学力・学習状況調査の「小中追跡」分析による課題の明確化と共有
- ②小中教員の合同授業研究，小中教員の相互乗り入れ授業，基礎学力・活用力向上に向けた連携調査等による授業改善
- ③授業での約束事「小中いっしょに取り組むこと」，「家庭学習のしおり」等による学習規律や家庭学習の確立に向けた一貫した取組（小中連携）
- ④メディアコントロールや生活リズムに視点をあてた家庭・地域連携による安心して学習や生活ができる学級づくり

見初小・神原中の連携



(4) 宇部市立神原中学校

- ①全国学力・学習状況調査の「小中追跡」分析による課題の明確化と共有
- ②「あいさつ・言葉遣い」，「学び合いの共通実践」，「学習・生活習慣・生活リズムの改善」を3本柱とした小・中学校での一貫・連携した取組
- ③言語活動の充実と板書計画を重視した授業づくり，教科指導の中でのキャリア教育，学習環境の整備等による学力の一層の定着

○調査研究の成果

1. 推進校における取組の成果

(1) 下関市立安岡小学校

- ・10月に実施した学力定着状況確認問題では、4月の全国学力・学習状況調査と比べて伸びが見られた。書くことへの抵抗がなくなり、自分の言葉で表現する力が伸びた。
- ・個に応じた指導や放課後の補充学習、ノート指導の充実等が図られた。
- ・小・中学校の教員が、学習指導・生徒指導上の課題を共有し、一緒に研修を進めることで、教職員の意識改革につながった。

(2) 下関市立安岡中学校

- ・自分の行動や発言に自信をもっている生徒が増加し、家庭学習を全くしないという生徒の割合が減少した。
- ・小中連携教育の推進、校内研修の活性化、家庭・地域との連携強化を基軸とした取組により、多くの教科で学習成果を上げた。

(3) 宇部市立見初小学校

- ・やまぐち学習支援プログラム学期末評価問題や学力定着状況確認問題の結果に、指導の成果が表れた。
- ・9年間を見通した指導を意識するようになり、合同研修会や実態調査をもとにした授業改善が進められた。
- ・活用する力を支える漢字や計算の習熟を全校体制で指導し、高めることができた。特に、「算数日記」の取組が、算数科における学力向上とともに、表現力の向上に結び付いた。

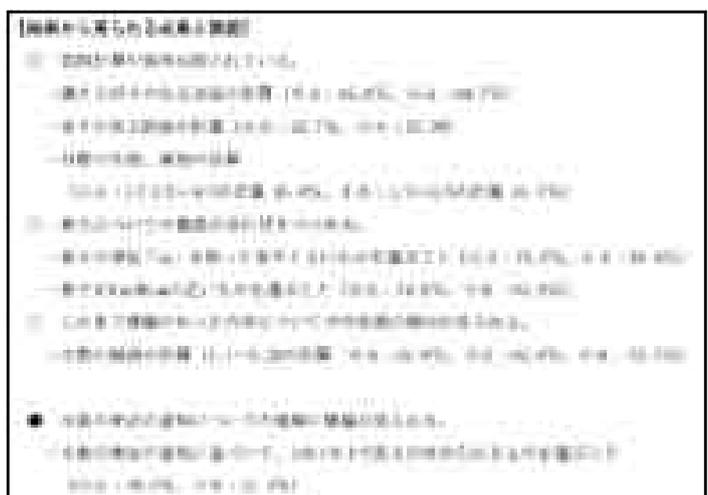
(4) 宇部市立神原中学校

- ・学び合いを取り入れることにより、意見のやり取りや議論の機会が増え、考えを文章で整理する力が身についてきた。
- ・学習することの有用性を理解し、意欲的な生徒が増えてきた。
- ・小学校での児童に寄り添った授業展開を参考に、生徒の視点を中心に考える授業に変わってきた。

2. 調査研究全体の成果

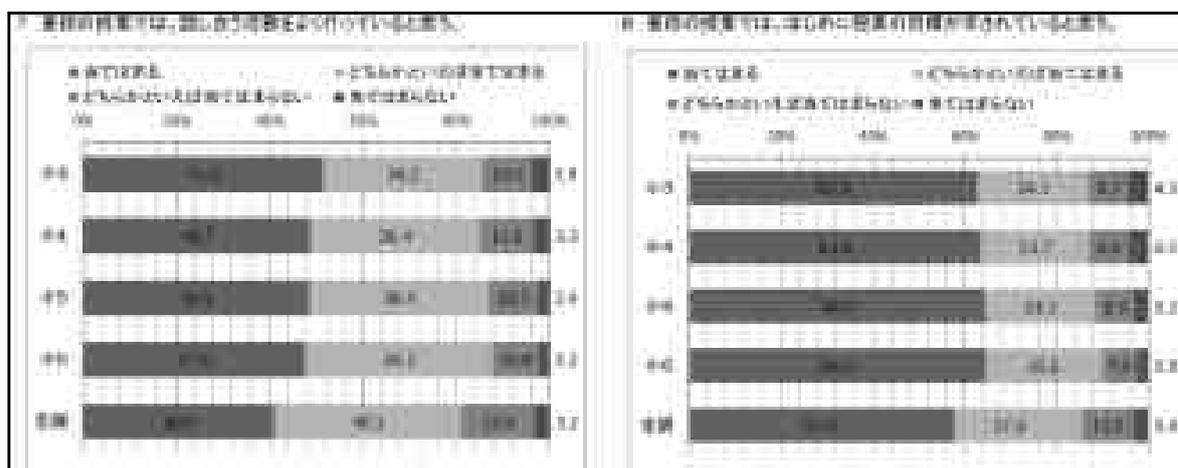
これまで4つの重点取組事項に基づく児童生徒の学力向上に向けた取組を推進してきた。

右の図は、平成25年10月に小学校3年生から中学校2年生までを対象に実施した学力定着状況確認問題の全県の結果から見られる小学校算数の成果と課題をまとめたものの一部である。これまで課題であった内容について、改善傾向が見られるとと



もに、基礎的・基本的な知識・技能の習得が図られている様子が伺える。

また、10月の学力定着状況確認問題で、児童生徒質問紙調査も実施したが、「普段の授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていると思う」、「普段の授業では、話し合う活動をよく行っていると思う」、「普段の授業では、はじめに授業の目標が示されていると思う」と回答した児童生徒が、4月の全国学力・学習状況調査に比べて増え、授業改善が進んでいることが伺える。



3. 取組の成果の普及

(1) 推進校における成果発表会

1月16日 見初小・神原中成果発表会 於：神原中 県内から61名参加

1月31日 安岡小・安岡中成果発表会 於：安岡小 県内から68名参加

(2) 学力向上担当者会議による成果発表

2月17日 全市町教委から学力向上担当指導主事19名が参加

(3) やまぐちっ子学力向上だより等による普及

3月下旬 「やまぐちっ子学力向上だより」で各校の取組紹介(県内全教職員配布)

3月下旬 山口県教育庁義務教育課のWebに各推進地区、推進校の取組を掲載

○ 今後の課題

前述したように、取組の一定の成果は見られるものの、依然として課題もあることから、次年度以降にその改善を図るための一層の取組を推進する必要がある。

(1) 4月の全国学力・学習状況調査とやまぐち学習支援プログラム確認問題、10月の学力定着状況確認問題による年2回の検証改善サイクルを活用した更なる学力向上の取組

(2) 教員の指導力向上に向けた研修機会の充実と、各学校における言語活動を重視した授業改善

(3) 小中連携による学習指導の一層の充実や学習習慣の確立

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成 25 年度委託事業完了報告書
【推進地区】

都道府県名	山口県	番号	8
-------	-----	----	---

推進地区名	宇部市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組の内容

1. 重点課題

「学び合い」のある授業を基軸とした授業改善

- (1) 教職員相互の「学び合い」を重視しながら、校内研修の活性化に取り組み、教員の資質能力を向上させること。
 - ・全教職員による一人一授業公開を実施し、日常的にも教師同士が授業を見せ合い「開かれた教室」を進める。
- (2) 言語活動の充実を図り、活用力を培うための授業づくりを推進すること。
 - ・やまぐち学習支援プログラムを教育課程の中に位置付け、評価問題等を実施し、事後の指導に活かす取組を推進する。
- (3) 義務教育の 9 年間を見通して、学力向上や生徒指導の充実など、指導に一貫性をもたせ、学力向上を推進すること。
 - ・全国学力・学習状況調査や全国標準学力検査（小 5、中 1）を実施し、各校の児童生徒の学力の傾向を把握するとともに、小中合同研修主任会にて小・中学校のつながりの中での課題を明確化にし、対策を考える。
- (4) 家庭と連携した学習習慣の定着を図ること。
 - ・各校で全国学力・学習状況調査や学力定着状況確認問題の結果分析等から見いだした課題克服に向けた家庭学習プリント（基本問題プリント、やまぐちっ子学習プリント）の計画的な活用を推進する。

2. 重点課題への取組状況

本市では、「子どもたち一人ひとりの学びと育ちを保障する教育の推進」を教育の重点目標とし、その実現のためには、小集団学習（2 人組、4 人組等）を取り入れた「学び合い」のある授業づくりを推進し、規律ある環境の中で子どもたちの学ぶ意欲を引き出しながら、確かな学力を育むことが重要であると考えた。平成 20 年度から中学校を中心に「学び合い」のある授業づくりを進めてきたが、平成 24 年度から市内の全小・中学校において取組を進めている。

そこで、「学び合い」のある授業（協同的な学び）を基軸とし、9 年間を見通した一貫性のある教育の充実を進める中で、校内研修を充実させ、教師の資質能力を向上させることで授業改善を

図り、子どもたちに基礎・基本と活用力を育み、確かな学力を身に付けさせることとした。

推進校の研究を進めるにあたり、諸調査の分析、改善点の検討等に担当指導主事が適宜参加し、助言を行った。また、公開授業研究会、成果発表会においても授業構想段階から担当指導主事が検討会に参加し、助言を行った。

(1) 公開授業研究会の推進

- ・市内の全教職員が一斉に他校の公開授業研究会に参加する「宇部授業の日」を設定した。
- ・各校において公開授業研修会を年1回以上実施した。

(2) 言語活動の充実を図り、活用力を培うための授業づくりの推進

- ・小集団学習（2人組、4人組）を取り入れた「学び合い」による聴き合い、伝え合う活動をとおして、言語活動の充実と活用力を培う場を授業構想段階から計画した。

(3) 校内研修の活性化

- ・全員参加型（ワークショップ型）や「学び合い」ある授業づくりの講師を招聘しての校内研修の実施により、教師同士の「学び合い」のある研修を推進した。

(4) 小中連携の推進

- ・各中学校ブロックにおいて、合同授業研究会を実施した。
- ・「学び合い」を基軸として授業参観や授業交流をし、課題の明確化や共有化を図った。

(5) 推進校（宇部市立見初小学校、宇部市立神原中学校）の取組

- ・小中連携による、「学び合い」のある授業づくりをとおした「確かな学力」の定着をめざした。
- ・「確かな学力」の定着に向けた小中連携による重点取組事項の設定。

①あいさつ、言葉遣い

- ・生活指導と教科指導の関連付けを行う。
- ・国語科、英語科を中心とした日本語のすばらしさ「繊細さ」「表現の豊かさ」等の理解を図る。

②授業研究をとおした教員同士の「学び合い」研修実践

- ・授業規律（姿勢、堂々とした発表）と学び合いをテーマとした共通実践。
神原中学校区3校（神原小学校、見初小学校、神原中学校）での提案授業のビデオ視聴による研究協議の実施。

③早寝・早起き・朝ご飯・メディアコントロール（生活環境・生活リズムの改善）

- ・生活環境・生活リズムの改善を行うこととおして家庭学習の習慣化を図る。
メディアコントロール、携帯電話のきまりづくり。

- ・各校における研究組織づくり。

①見初小学校

- ・活用力を高める授業づくり部会、「学び合い」授業力向上部会、学校と家庭の基礎学力向上への基盤づくり部会

②神原中学校

- ・授業づくり班、小中連携班、キャリア教育・道徳教育班、学習環境班

(6) 成果発表会や研修会の開催等

- ・公開授業研究会の実施

公開授業研究会、自主公開授業研究会を実施し、授業参観、研究協議への参加をとおして、

児童生徒の「学び合い」を視点とした研修交流。

- ・「宇部授業の日」の実施

平成25年11月22日（金）を「宇部授業の日」とし、市内6校の公開授業研究会へ教員が参加し、研修を行った。（神原中学校3年生数学で公開授業実施）

- ・成果発表会の実施

平成26年1月16日（木）に成果発表会を実施し、授業公開、研究協議とともに本研究の取組概要を参会者に説明した。（神原中学校2年生理科で公開授業実施）

3. 調査研究の成果の把握・検証

- ・本研究に取り組んだことによって、これまで以上に小・中学校の教員間の研修が進み、接続校での課題を共有することができた。その一つの成果が小・中学校で同一の計算テスト、漢字テストの実施である。推進校における全国学力学習状況調査等の結果分析から、算数・数学、国語における基礎学力の定着を図るため、小学校の計算テスト、漢字テストを中学校でも実施したところ、正答率に同じ傾向が見られた。そのため、誤答率を0に近づけるために同様の出題を繰り返し行い、結果分析を続けたところ、確実に誤答率は下がってきている。
- ・推進校における児童生徒の学習面、生活面の追跡調査から見えてきた生活改善点を小中共同取組事項として捉えることができた。その成果が、「朝食」「宿題」「復習」「規則」「読書」を義務教育9年間をとおして重点的に指導する生活習慣に位置付けられたことである。
- ・学力向上プロジェクト委員会を立ち上げ、市内小・中学校における全国学力学習状況調査の結果分析を行い、課題とその改善策を提起した。その分析結果と課題、改善策は市のホームページに掲載するとともに、次年度の小・中学校共通の課題としてまとめ、各学校に周知し、学力向上プラン等に活かしていく。また、市内各小・中学校において、自校の児童生徒の課題克服に向けた学習プランを作成し、家庭学習プリント（基本問題プリント、やまぐちっ子学習プリント等）の計画的な活用を行っている。

4. 今後の課題

- ・各校における公開授業研究会の実施が授業構想段階から学年、教科をこえた教員間で行われており、児童生徒の「学び合い」を深める授業が追究され、授業改善の視点を得られている。今後は、今回の研究で推進校で行われた小中合同の授業検討会を広めていくことで、これまで以上に義務教育9年間を見通した学力向上や生徒指導の充実など、指導に一貫性をもたせることができると思う。
- ・現在行っている学習プランの検証、見直しを行うことで、今後も児童生徒の実態把握に沿った取組を続けなければならない。
- ・本研究の推進校の取組を継続して行い、「確かな学力」の定着に向けた一つのモデルプランとして研究経過を情報発信していく機会を設定する。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書
【推進校】

都道府県名	山口県	番号	8
-------	-----	----	---

推進校名	山口県宇部市立見初小学校
------	--------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

- 聴き合いによる学びを生み出す授業づくり・授業研究を通じた授業改善
- 小中連携による学習規律や家庭学習の確立に向けた一貫した取組推進
- 家庭・地域連携による、安心して学習や生活ができる学級づくり

2. 重点課題への取組状況

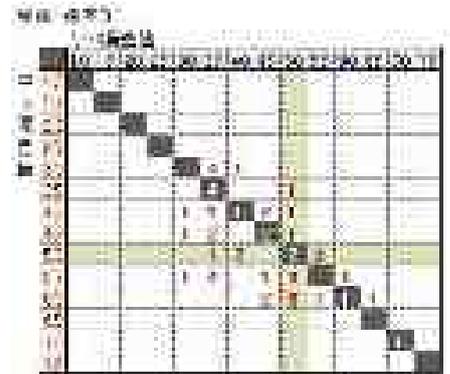
(1) 全国学力・学習状況調査の「小中追跡」分析

現在の中学3年生について、今回の調査と3年前の調査（小学6年生のとき）を関連させて分析し、小中連携の視点で傾向や課題を探った。

①学力について

偏差値に換算して小6から中3にかけての変化を分析した。特に算数・数学について、成績がかなり変化した生徒がいるものの、概して小学校算数の状況が中学校数学の状況に移行している傾向がみられた。

<算数・数学Bの変化（数値は人数）>



②学力と生活との相関関係

中3における学力と生活の関係とともに、中3の学力と小6時代の生活との関係も分析した。その結果、下記（宿題の例）のように、中3の学力が、小学校時代から積み重ねられた生活状況と相関が強いものは、次の5項目であった。

- 朝食を毎日食べる。
- 家で宿題をしている。
- 家で授業の復習をしている。
- 学校の規則を守っている。
- 読書が好きである。

③生活状況について

小6時代と中3現在を比較した。「人の気持ちが分かる人間になりたい」などの項目では小学校から中学校にかけて向上し、心の成長が伺えた。その反面で、「将来の目標や夢」、「学習内容の有用感」などについては肯定意見が大きく減少している。(全国においてもこうした傾向がある。)

④分析結果のまとめ

- 算数数学については、小中の学力の積み重ねが大切である。
- 小学校時代からの生活習慣の積み重ねが、中学校での学力に大きく影響するものとして、「朝食の摂取」、「家庭学習（特に宿題と復習）」、「読書の習慣」、「規範意識」があげられ、小中9年間を通じて、重点的に指導していくことが大切と考えられる。
- 中学校において、将来の目標や夢、学習内容の有用感などをもたせるため、キャリア教育の強化や、学習内容と生活を関連付けるなど興味や関心を高める授業の工夫が望まれる。

(2) 聴き合いによる学びを生み出す授業づくり・授業研究を通じた授業改善

①小中教員の合同授業研究

「聴き合う関係の中で、互いを認め合いながら、学びを深める授業」を目指し、年間を通じた授業研究を小中で相互に行った。また小中合同の研修会を開き、授業をもとにした研究協議を積み重ねた。

②小中教員の相互乗り入れ授業

中学校全教員が小学校への乗り入れ授業（国語、数学、理科、英語、体育）を行った。また、小学校教員が中学校教員とチームティーチングで中学校の授業（数学、理科）に参加した。

③基礎学力・活用力向上に向けた連携調査と指導、啓発

ア 基礎計算力の調査

小6の学力が特に算数においては3年後も影響する傾向にあることから、基礎計算力の定着状況を調べ、小中ともに指導に生かした。また、漢字についても同様に行った。

小数の計算、帯分数の計算、通分に小中共通の課題があることがわかった。

<基礎計算調査の結果（数値は誤答率）>

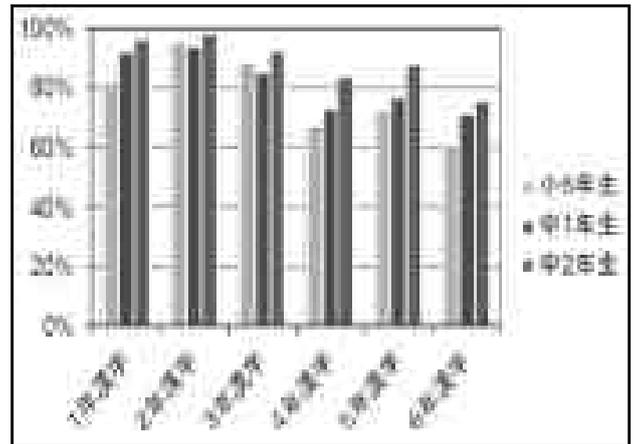
	算数基礎	算数応用	数学基礎
正負の数	10%	14%	14%
分数の性質	22%	17%	24%
正負の数と整数	22%	22%	24%
四則計算	22%	22%	24%
正負の数と整数 （帯分数、帯分数計算）	24%	22%	24%
小数の計算	19%	14%	22%
帯分数計算	17%	22%	22%
通分・約分	22%	17%	27%

イ 漢字の調査

小1から小6で学習する漢字について、それぞれ正答率を小6、中1、中2ごとに調べた。小6、中1、中2と正答率は増加するが、どの学年で調査しても4、6年の漢字の定着率が低くなっている。3年生以降、正答率が下降することから、定着を図るために反復練習にしっかり取り組ませた。

また、語彙を増やし表現力を伸ばすために読書指導にも力を入れた。

<漢字調査の結果（数値は正答率）>



ウ 朝学（15分間）の計画的な実施

国語→月・水曜日 算数→火・木曜日 読み聞かせ・読書→金曜日と計画し、全校統一の朝学指導を行った。

エ 夏休み学習教室の実施

2年以上の希望者及び学習支援が必要な児童を対象とし、基礎学力向上に向けた学習内容を中心に組み合わせた。

オ やまぐち学習支援プログラムの活用

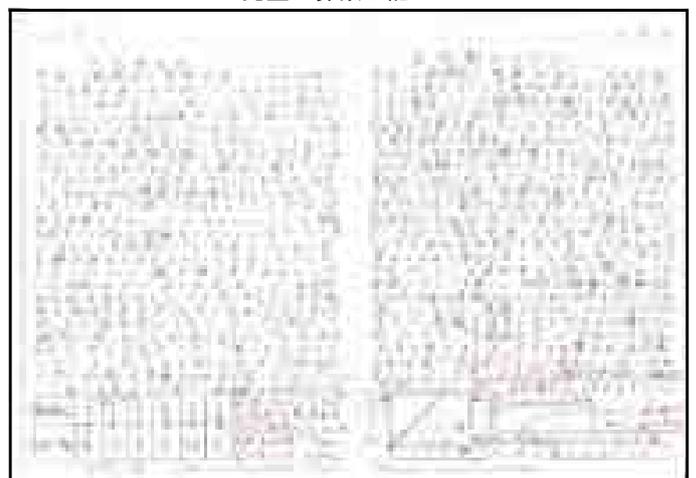
やまぐち学習支援プログラム小学校領域単元別評価問題（3～6年）、やまぐちっ子学習プリント（1，2年）を週末の宿題で取り組ませ、週明けに答え合わせと解説を行った。

カ 算数科における表現力向上に焦点化した取組（算数日記）

児童が自らの思考を振り返り、その過程を表現する学習活動を仕組み、表現力の向上をめざした。学習内容の理解を深めるとともに、表現力も高めることをねらい、以下の5点を意識し算数授業の復習に取り組ませた。

<児童の算数日記>

- 図に表したり、立式の根拠となることを明らかにさせるなど、その日に学習したことを自分の思考に沿って書く。
- みんなで考えた問題について、自分はどう考えたのか、友だちはどう考えたのかをわかりやすく書く。
- 自分がわからなかったところをくわしく書く。



- わからなかったことが、どのようにしてわかったかを書く。
- だれが、どんな考えを言って、それについて自分がどう考えたのかを書く。

キ ふれあい学習

学習内容の理解から一步踏み込んだ表現力の向上をねらい、高学年児童（1，2学期は6年生、3学期は5年生）が、下学年児童の算数課題の採点や説明などを行う「ふれあい学習」を行った。事前に課題プリントを解き、質問などを想定して準備を行った。自分がわかるだけでなく他者が理解できるようにわかりやすく教えることが必要となるため、説明力の向上にも効果的であった。

<1学期のふれあい学習より>

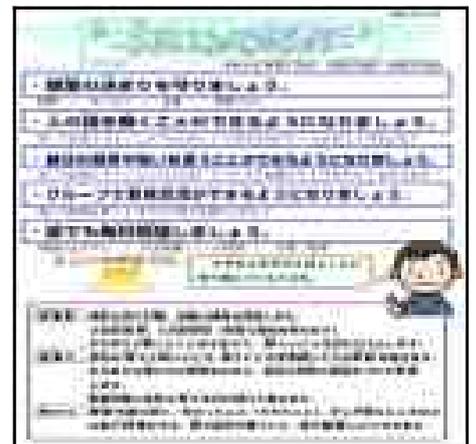


(3) 小中連携による学習規律や家庭学習の確立に向けた一貫した取組推進

①学校生活の向上に向けた小中連携指導

授業での約束ごと「小中いっしょに取り組むこと」（右図）を作成し、9年間を通した共通実践に取り組み始めた。

<小・中いっしょに取り組むこと>



- 授業の決まりを守る。
- 人の話を聞く。
- 自分の意見や思いを伝え合う。
- グループで意見交換ができる。
- 家でも毎日勉強に取り組む。

②家庭学習の習慣化に関する取組

家庭学習のしおり（児童向け）、てびき（家庭向け）を配付し、啓発した。

(4) 家庭・地域連携による、安心して学習や生活ができる学級づくり

①メディアコントロールをめざした家庭・地域との連携指導

情報機器との関わりについて、家庭や地域と連携して以下の取組を行った。

- メディア調査の結果をもとに、PTAと協力した啓発
- 連携する小中の保護者や地域の方々を招いたメディア講演会

②小中合同の学校保健安全委員会

- 小中合同で保護者や医療関係者も含めた学校保健安全委員会を開催
- 生活リズムの啓発の取組を実施

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 見初小学校の成果と課題

全国学力学習状況調査の結果分析

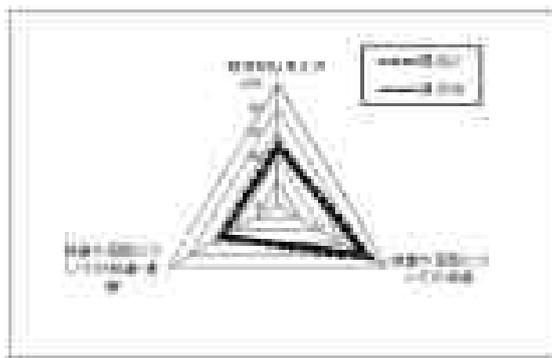
全国学力学習状況調査年度間比較（標準化得点＝全国100）

	国語A	国語B	算数A	算数B
平成24年度	94	95	93	97
平成25年度	102	103	102	104

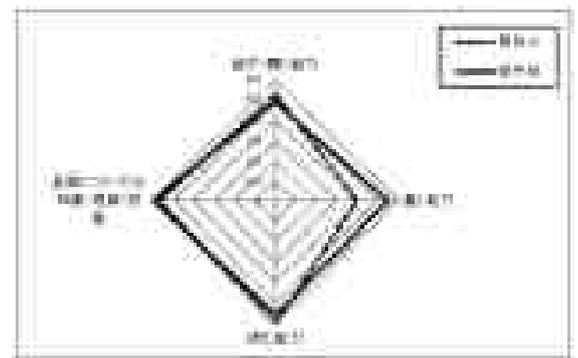
総合的にみて、国語・算数とも平成25年度は得点が高かった。しかしながら国語の書く問題「接続語を使って1文を2文に分けて書く」では、唯一全国平均を下回ったことから、文法的な学習内容に課題が残った。

(2) 平成25年度学力定着状況確認問題（山口県）の結果分析

<6学年算数の結果>



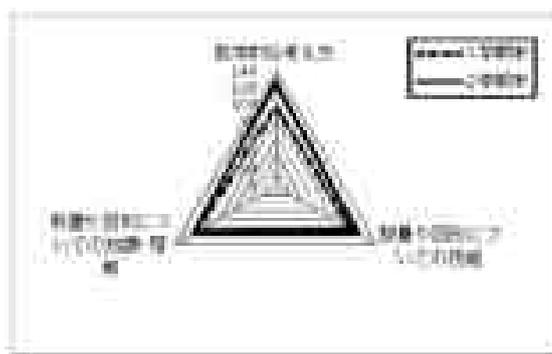
<6学年国語の結果>



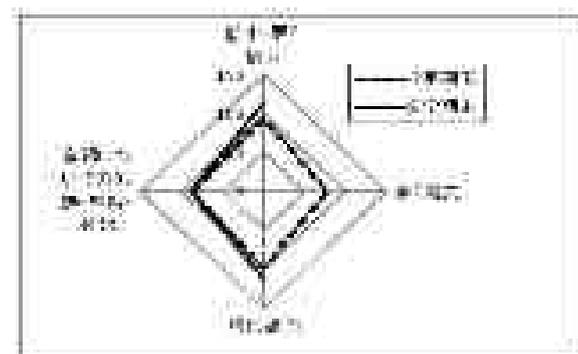
算数の数量や図形についての技能は、高い正答率となった。説明を求められる問題にも丁寧に取り組み、表現力も向上したといえる。一方で国語の書く能力については、全国学力学習状況調査の結果と同じく正答率が低い結果となった。特に主語と述語の関係に気を付けて、1文を2文に分ける問題や読み手を意識した文章を書く問題に課題が残った。

(3) やまぐち学習支援プログラム学期末評価問題（山口県）の結果分析

<6学年算数の結果>



<6学年国語の結果>



2学期は国語の3領域、算数のすべての領域について正答率が向上している。相手に意図がわかりやすく伝わるように文章の続きを考えて書く問題では正答率が対県平均115ポイントとなっており、指導の成果が表れたと考えられる。また、他の学年についても「書くこと」の領域の正答率が1学期と比べて向上してきた。

(4) 総括

小中連携を軸に、教員同士の連携が大変深まった1年だった。特に9年間を見通した指導を意識するようになり、児童生徒にとって「わかる授業」とはどのようなものなのか、わかったことをしっかりと定着させるためにはどのような取組が効果的なのかについて、小中合同の研修会や児童生徒の実態調査を授業改善に生かすことができた。特に「算数日記」の取組が算数における学力向上とともに国語の表現力の向上にも結びついた。

また、活用する力を支える漢字や計算の習熟を全校体制で指導し高められたこと、文章表現力をやまぐち学習支援プログラム等を活用して向上させることができたことなど、児童も教員も、学力、人間関係づくり、生活習慣の向上が実感できる取組だった。

4. 今後の課題

今年度の取組の過程で見えてきたことは次の7点である。今後は、これらを中心に、さらに小中連携による実践を深め、児童生徒や保護者、そして教職員がその成果を確実に感じられるよう、総力を結集していきたい。

- ① 義務教育の9年間を見通して、どのような児童・生徒を育てていくのかという全体構想や発達段階に応じた目標を設定していくとともに、これまでの包括的な取組をさらに充実させていくこと。
- ② 学力状況調査等の小中共同分析を継続させ、課題解決に向けて、PDCAサイクルによる具体的な実践を深めていくこと。
- ③ 「学び合い」を推進していくための学習習慣や学習規律など、9年間を見通した系統的な学びの基礎づくりを徹底すること。
- ④ 「学び合い」による共通した指導過程での授業改善を積み重ねることで、より質の高い授業づくり、わかる授業づくりに結びつけ、学力向上に繋げること。
- ⑤ 教育実践をより効果のあるものとするために、小中が統一して取り組むことと合わせて、連携しながらも各校独自に取り組むこと、新たに協力していくべきことなどを、学校教育目標とリンクさせながら具体化を図り実践していくこと。
- ⑥ 小・中学校の教職員が、小中の垣根を越えた信頼関係をさらに構築し、9年間の児童生徒の育ちを見守り続けていくこと。
- ⑦ 小・中学校の保護者や地域との有機的な連携をさらに推進していくこと。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書
【推進校】

都道府県名	山口県	番号	8
-------	-----	----	---

推進校名	山口県宇部市立神原中学校
------	--------------

1. 重点課題

学ぶ意義や目的をはっきりさせるためにキャリア教育を充実するとともに、確かな学力と人と関わる力を培うために「指導方法の工夫改善」「研修体制の充実」「学習環境の整備」「生活・学習習慣の定着」という4つの方向性を総合的に捉えて実践する。そして、それらをうまく機能させるために「校区内小学校との連携」「家庭・地域との協働」を基盤とする。

取組の方向性としては、まず、小・中学校が「学び合いのある授業づくり」を共通テーマに掲げて合同で授業研究に取り組むとともに9年間を見通した一貫性のある指導について検討する。さらに、小中共同で全国学力・学習状況調査をはじめ各資料等の分析を行い、すべての教育活動を学力向上の観点から見直し、小・中学校で一貫・連携して取り組む項目及び各校種ごとに取り組む項目を整理して実践・検証を行う。

2. 重点課題への取組状況

小中共同で全国学力・学習状況調査をはじめ各資料等の分析を行い、すべての教育活動や児童生徒の実態を学力向上の観点から見直し、小・中学校で一貫・連携して取り組む課題及び各校種ごとの課題を整理し、関連する様々な面から確かな学力の育成に向けた取組を実践・検証した。

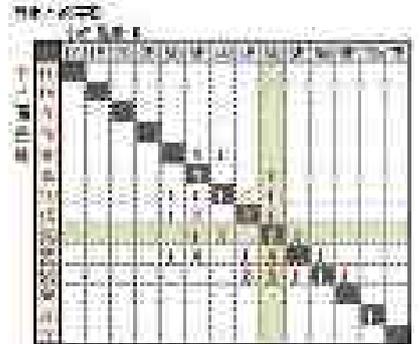
(1) 全国学力・学習状況調査の「小中追跡」分析

現在の中学3年生について、今回の調査と3年前の調査（小学6年生のとき）を関連させて分析し、小中連携の視点で傾向や課題を探った。

① 学力について

偏差値に換算して小6から中3にかけての変化を分析した。特に算数・数学について、成績がかなり変化している生徒があるものの、概して小学校算数の状況が中学校数学の状況に移行している傾向がみられた。

<算数・数学Bの変化（数値は人数）>



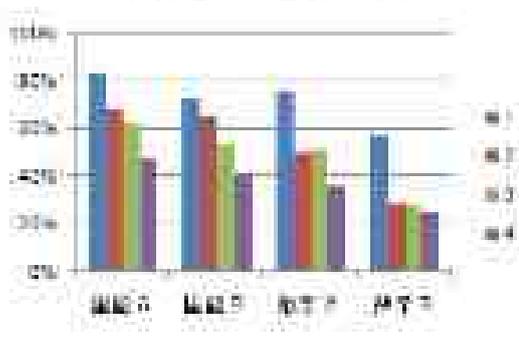
② 学力と生活との相関関係

中3における学力と生活の関係とともに、中3の学力と小6時代の生活との関係も分析した。その結果、下記（宿題の例）のように、中3の学力が、小学校時代から積み重ねられた生活状況と相関が強いものは、次の5項目であった。

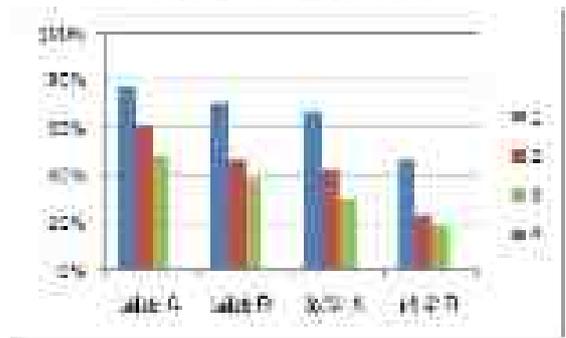
- ◇朝食を毎日食べる。
- ◇家で宿題をしている。
- ◇家で授業の復習をしている。
- ◇学校の規則を守っている。
- ◇読書が好きである。

家で、学校の宿題をしていますか

「中3学力」と「中3生活」の相関



「中3学力」と「小6生活」の相関



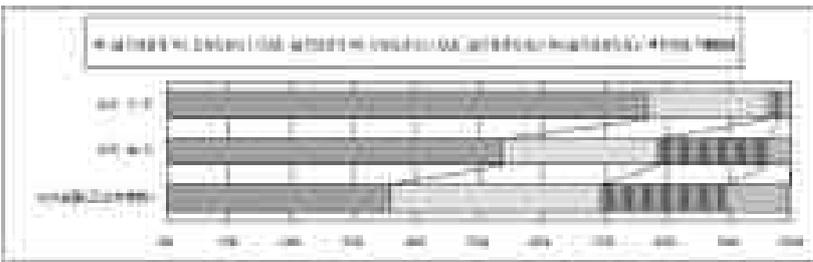
○ % : 学力調査の正答率

○ 1 : している 2 : どちらかといえはしている 3 : あまりしていない 4 : 全くしていない

③ 生活状況について

小6時代と中3現在を比較した。「人の気持ちが分かる人間になりたい」などの項目では小から中にかけて向上し心の成長が伺えた。その反面で、「将来の目標や夢」「学習内容の有用感」などについては肯定意見が大きく減少していることがわかった。(全国においてもこうした傾向がある。)

数学(算数)の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。



④ 課題や今後の研究取組の方向性について (分析結果より)

- ・特に算数数学については、小中の学力の積み重ねが大切である。
- ・小学校時代からの生活習慣の積み重ねが、中学校での学力に大きく影響するものとして、「朝食摂取」、「家庭学習(特に宿題と復習)」、「読書の習慣」、「規範意識」があげられ、小中9年間を通じて、重点的に指導していくことが大切と考えられる。
- ・中学校において、将来の目標や夢、学習内容の有用感などをもたせるため、キャリア教育の強化や、学習内容と生活を関連付けるなど興味や関心を高める授業の工夫が望まれる。

(2) 小・中学校で一貫・連携した取組(「小中連携3本柱」)

9年間を通じた一貫性のある取組として、次の「3本柱」に整理して実践することとした。

① あいさつ・言葉遣い

充実した授業の下支えとなるのが学習規律、学習環境であり、その基盤は「あいさつ・言葉遣い」であろう。元気のよい明るいあいさつ、時と場をわきまえた適切な言葉遣いは、単なる儀礼的なものでなく、授業での発表や話し合い、聴き合いをスムーズにするとともに、日々のコミュニケーションづくりにもつながる。また、学級等に許容的雰囲気をつくり出し、互いが楽しく学ぶ環境づくりにも資するものである。小学校低学年からのこうした習慣づくりを継続していくこととした。



◇小学校…「言葉のアンケート」から自分の発言を振り返ることで、児童の「気持ちを伝え合う言葉を大切にしようとする態度」の育成を図った。

◇中学校…生活面としての向上のみならず、国語や英語など教科指導を通して、豊かな表現力をもつ日本語の素晴らしさに気付き、よりより日本語の使い手となる言語能力の育成を図った。

② 「学び合いのある授業づくり」の共通実践(小中合同授業研究)

学力向上の取組の中心は当然「授業」になる。宇部市では、以前から、学校を共生・協同の場として位置付け、子ども同士、子どもと教師、教師相互、そして保護者や地域も含めた豊かな人間関係の中で人格形成と学力向上をめざす「学び合いのある学校づくり」を推進している。こうした経緯を踏まえ、「学び合いのある授業づくり」を小中共通の授業研究テーマとして掲げ、子ども主体の授業を創造し、学ぶ意欲を引き出しながら確かな学力を育む共通実践に取り組んだ。

ア 小中教員の合同授業研究

「聴き合う関係の中で、互いを認め合いながら、学びを深める授業」を目指し、年間を通じた授業研究を小中で相互に行った。また小中合同の研修会を開き、授業をもとにした研究協議を積み重ねた。



イ 小中教員の相互乗り入れ授業

中学校全教員が小学校への乗り入れ授業を行った。(年間30時間) また、小学校教員が中学校教員とチームティーチングで中学校の授業に参加した。

ウ 基礎学力向上に向けた調査

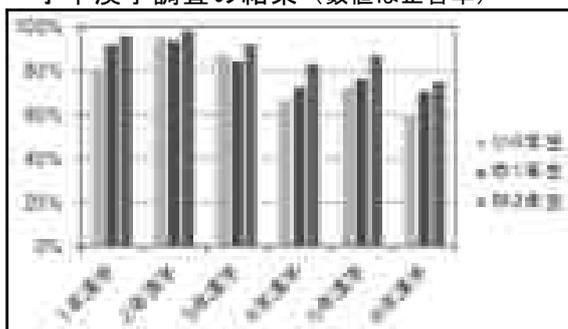
小6の学力が特に算数においては3年後も影響する傾向にあることから、基礎計算力の定着状況を調べ、小中ともに指導に生かした。また、漢字についても同様に行った。

基礎計算調査の結果（数値は誤答率）

	小学5年	中学1年	小学6年
1. 100%	100%	100%	100%
2. 100%	100%	100%	100%
3. 100%	100%	100%	100%
4. 100%	100%	100%	100%
5. 100%	100%	100%	100%
6. 100%	100%	100%	100%
7. 100%	100%	100%	100%
8. 100%	100%	100%	100%
9. 100%	100%	100%	100%
10. 100%	100%	100%	100%

小数の計算、帯分数の計算、通分に小中共通の課題があることがわかる。その他誤答率の低い問題においても、誤答の出現は中学校まで続く傾向にあった。7 + 8 × 2のように中学校で文字式を学習することで、小学校で学習した内容の理解が深まると考えられるものもあった。

小中漢字調査の結果（数値は正答率）



小1から小6で学習する漢字について、それぞれ正答率を小6、中1、中2ごとに調べた。小6、中1、中2と正答率は増加するが、どの学年で調査しても4、6年の漢字の定着率が低くなっている。3年生以降、正答率が下降することから、定着を図るために反復練習にしっかりと取り組ませた。また、語彙を増やし表現力を伸ばすために読書指導にも力を入れた。

③ 学習・生活習慣・生活リズムの向上（早寝・早起き・朝ご飯・メディアコントロール）

小中データ分析から、小中9年間を通じて、「朝食摂取」、「家庭学習（特に宿題と復習）」「読書習慣」、「規範意識」について重点的に指導していくことが重要と考えられることがわかった。

また、携帯電話やスマートフォンに関するアンケート調査を行った結果、情報機器が子どもの生活リズムや学習習慣に多大な影響を与えていることもわかった。こうした生活習慣やリズムについて、小・中学校で連携してPTAの協力も得ながら向上させていくことも学力向上の重要な柱として取り組んだ。

ア 学校生活の向上に向けた小中連携指導

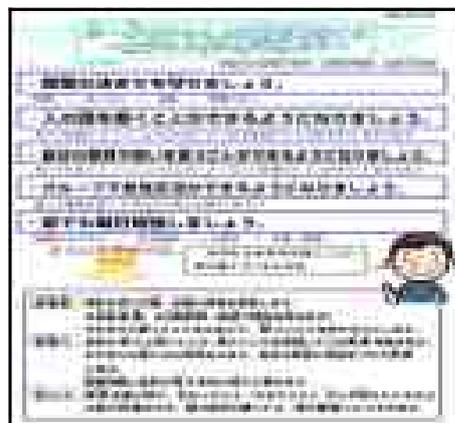
授業での約束ごと「小中いっしょに取り組むこと」を作成し、9年間を通して共通実践をスタートさせた。

- ◇授業の決まりを守る。◇人の話を聞く。◇自分の意見や思いを伝え合う。◇グループで意見交換ができる。
- ◇家でも毎日勉強に取り組む。

イ メディアコントロールをめざした家庭・地域との連携

情報機器との関わりについて、家庭や地域と連携して以下の取組を行った。

- ◇メディア調査の結果をもとに、PTAと協力した啓発
- ◇連携する小中の保護者や地域の方々を招いたメディア講演会



【小・中いっしょに取り組むこと】

ウ 小中合同の学校保健安全委員会

- ◇小中合同で保護者や医療関係者も含めた学校保健安全委員会を開催
- ◇生活リズムの啓発の取組を実施

(3) 中学校独自の取組

① 言語活動の充実と板書計画を重視した授業づくり

小中で「学び合いのある授業づくり」に取り組む中で、中学校では特に「言語活動の充実」による思考力、判断力、表現力等の育成とともに、「板書計画の重視」による学びの見通しや振り返りを大切にして、学力の一層の定着を図った。

<実践例>

- ・英語…身近な体験のスピーチ。発音・抑揚はもとより、どう表現すれば気持ちがよく伝わるかを考え、時にはジェスチャーを交えての発表。
- ・数学…図形の論証や関数のグラフについて、なぜそうなるのかといった説明やグラフから読み取れることを発表しあったり、事象をグラフ化したりするなどの学習活動を工夫し、頻繁な授業公開を実施。
- ・国語…読んだ文章をもとに、自分の知識や経験に照らし合わせて自分の意見を加えて表現。

- ・音楽…思い描いたイメージをリコーダーを用いて曲のリズムや強弱などで表現し合う活動。
- ・全教科…小学校の授業での板書の綿密さを中学校に生かす。
 (・板書型指導案を活用し、最後まで授業を見通して、要点や流れを板書に残す。)
 (・授業の最後に板書を見て今日の学習を振り返る時間の設定。)



【発表の場の工夫】



【授業公開の日常化】



【板書の工夫】

② 教科指導の中でのキャリア教育

生徒質問紙の「授業での学習は将来役に立つと思いますか」などの質問に対する肯定的な回答が小学校時代よりも減少していることから、教科指導の中でのキャリア教育を意識し、各教科の醍醐味、生活との関連、有用性、応用性などを伝え、興味や関心を高める授業を工夫した。

<実践例>

- ・数学…身近な模型や実物を用いた関数の学習や折り紙を用いた図形の学習などの工夫。
- ・英語…職場体験を通して感じたことや将来の夢を英語にして発表。海外で活躍する企業の方を招き、実際に現地で使用された表現を使ってのスキット作り。
- ・家庭…食生活改善推進員を招いての調理実習や保育園の園児を招いて保育実習など多くの人々に関わりながら学習を深める工夫。
- ・理科…いくつかの抵抗器を組み合わせて目的にかなう回路を考案し、実測して確認する発展課題を工夫した学習。



【課題提示の工夫】



【園児を招いた保育実習】



【講師を招いた調理実習】

③ 学習環境の整備

作品の鑑賞や学習の足跡が見える展示や掲示の工夫、空き教室の教科教室化に取り組み、環境面の充実を図った。



【作品展示】



【季節を感じる言葉】



【教科教室】

④ 道徳教育の充実

相手の気持ちを察した思いやりの心、助け合う心が「学び合いを取り入れた授業」を支える重要な要素となる。学力の土台は人権、思いやり、規範意識などの心の教育と捉え、道徳教育の充実に努めた。

＜実践例＞

- ・家庭や地域と連携し、「命の大切さを学ぶ教室」講演会の実施。
- ・生徒会による『思いやり』の気持ちを浸透させる「For (Four) You宣言」の採択。
- ・「囲碁教室」など地域の方と生徒の自由な交流時間の設定。



【囲碁教室】

【命の大切さを学ぶ】

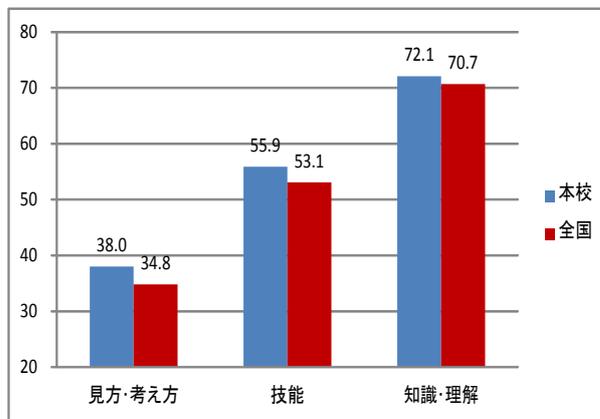
3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 全国学力・学習状況調査の結果分析 (H22、H25調査)

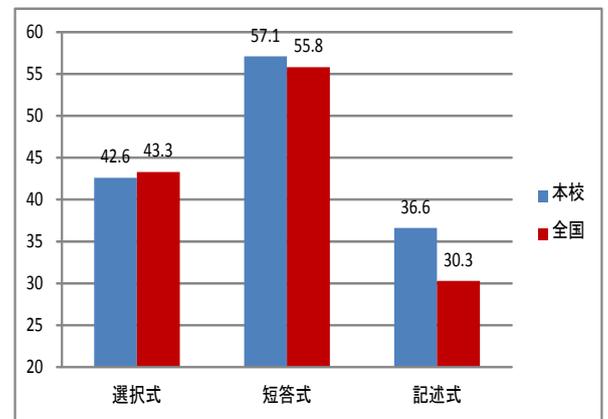
◇全国学力・学習状況調査 (平均偏差値の比較) ※平成22年度 (小学6年) → 25年度 (中学3年)

	国語 A	国語 B	算数数学 A	算数数学 B
小学6年時 → 中学3年時	1.7上昇	1.8上昇	3.0上昇	3.9上昇

◇平成25年度全国学力・学習状況調査 (数学B 平均正答率)



【評価の観点】



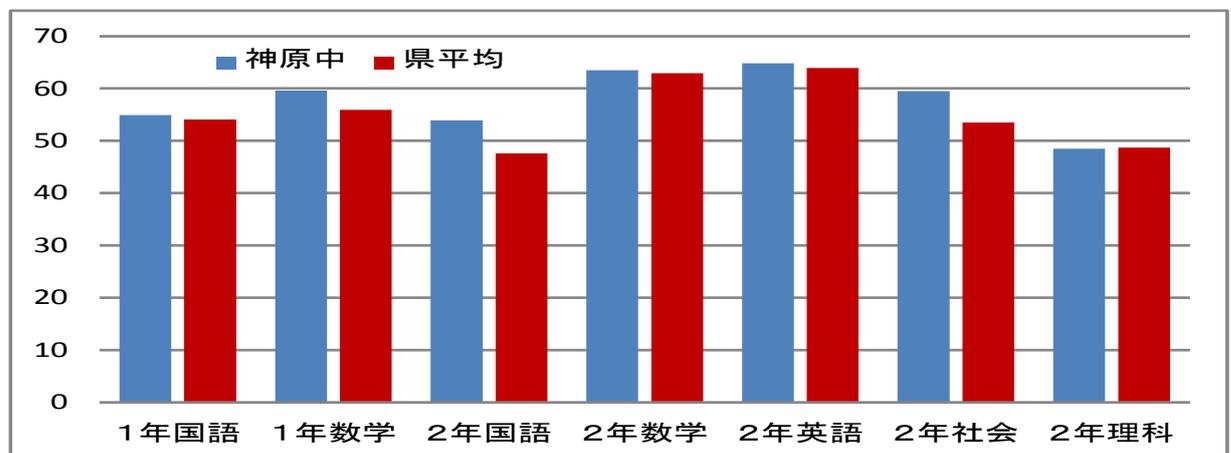
【問題形式】

3年生において、小学6年生時から国語、数学の結果が伸びている。特に数学Bのすべての観点で全国平均を上回り、なかでも記述式問題の正答率が高くなっている。これは学び合いを取り入れることにより、意見のやり取りや議論の機会が増え、考えを文章に整理する力が身につけてきたものと捉えている。

また次のような成果も表れてきた。

- ・以前はすぐにあきらめていた生徒が、応用的な問題にも粘り強く取り組むようになり、積極的に友だちや教師に質問する姿が多く見られるようになった。
- ・学習することの有用性を理解し、意欲的な生徒が増えてきた。

(2) 学力定着状況確認問題 (山口県) の結果分析 (平均正答率) ※平成25年10月実施 (1, 2年)



県平均比較	+0.8	+3.7	+6.3	+0.6	+0.9	+6.0	-0.1
-------	------	------	------	------	------	------	------

1・2年生も今までの取組が実り、総合的に力をつけている。ほとんどの教科で県平均を上回っている。

1年生では、国語において特に「書く能力」の正答率が高かった。これは表現力を豊かにする作文の指導や学び合いにより、自分の意見を文章にまとめることを日常的に行ってきた成果と思われる。数学ではどの観点も県平均以上であり、特に記述式の問題で正答率が高いのは国語の「書く能力」の高さとも関連するものと考えている。

2年生では、特に国語と社会が県平均より6ポイント以上高い正答率が出ている。国語では「話す・聞く能力」、社会では「資料活用の技能」と「社会的事象についての知識・理解」が特に高い。これは学び合いで人の話をしっかり聞いたり、自分の知識や資料を上手にまとめ、意見を分かりやすく発表することができるようになったからではないかと思われる。一方で「授業で分からないことがあったらどうすることが多いですか」に55%の生徒が「友だちに尋ねる」と答えており、1年次の25%よりも大きく増えている。逆に「そのままにしておく」と答えている生徒が減少しており、これも学び合いが浸透している成果と捉えている。

(3) 生徒・教員の変容

① 生徒の意見から

- ・学び合いをすると話す場面が多くなる。今までは比較的黙っていたことが多かった私が、ある時仕方なく意見を述べたところ、みんなにすごく感心されたのでうれしかった。それからは積極的に話せるようになった。
- ・もう少しで解けるところでチャイムが鳴って残念だったことがあった。授業の終わりが残念という気持ちになることが増えてきた。
- ・料理のプロである外部講師の方に「片付けが上手な人は料理も上手になれる」と励まされてうれしかった。これからも挑戦してみようという気持ちが湧いてくるようになった。
- ・ある実験で、計算上は間違っていないのに、実際は違う表示が出た。なぜなのか原因をみんなで考えあつて突き止めることができた時はとてもうれしかった。みんなで考えることの楽しさが分かってきた。
- ・問題を解くときや質問の意味が分からないとき、友だちに聞いたら分かりやすい説明ですっきり納得することができた。
- ・以前は問題が解けたら分かったつもりでいた。しかし自分が友だちに教える途中で分からなくなることがあり、そこで友だちともう一度考えてみると、自分がよく分かっていないことも分かり、より深く理解できるようになった。

② 教員の意見から

- ・小学校からの追跡調査で苦手な分野の傾向をあらかじめ知ることができたので、的を絞った指導ができた。
- ・以前は主題を教え込むことに熱心になっていたが、小学校での子どもに寄り添った授業の展開を参考に、生徒の視点を中心に考える授業に変わってきた。
- ・学び合いをすることで教師も生徒もお互いによく「聴く」ということを意識するようになった。学校の雰囲気以前より落ち着いてきた。
- ・全員が「解いてみたい」と思うような課題設定がポイントになる。その解決の過程で、他の生徒の色々な考え方に触れることで理解が深まる場面が増えた。深く考えることは活用力の向上につながる。またいつもはすぐに解決する生徒が、逆に他の生徒からヒントを得る場面も出てきた。
- ・授業後もしばらくの間、多くの生徒が席を立たずに考えを述べ合ったり、教師に質問したりする光景も見られるようになってきた。こうした学びに没頭できる課題・環境づくりが大切である。
- ・どのクラスも男女問わず自然と会話ができる雰囲気ができてきた。初めは教師と1対1を求めている生徒も、学び合いを続けていくうちにグループでの話合いに参加し、他の生徒と上手に関わることができるようになってきた。

4. 今後の課題

- ◇各教科の指導をキャリア教育と一層関連させて推進することが必要である。学習内容に有用感をもたせ、教科の学習が将来の目標や夢にもつながることを実感させることが、学習への意欲を高め、学力を向上させる大きな要因となる。こうした授業づくりについて、さらに研究・推進していくこと。
- ◇「学び合いのある授業」を一層推進するためにも、「言語活動の充実」についてすべての教科で実践と研究を積み重ね、指導技術を高めていくこと。
- ◇小・中学校の連携した取組について、特に次のことを重視していくこと。
 - ・義務教育の9年間を見通して、どのような児童生徒を育てるかという全体構想や発達段階に応じた目標を設定するとともに、これまでの包括的な取組をさらに充実させること。
 - ・学力状況調査等の小中共同分析を継続させ、課題の共有及びその解決に向けて、PDCAサイクルによる具体的な実践を深めること。
 - ・学習習慣や学習規律など、9年間を見通した系統的な学びの基礎づくりを徹底すること。
 - ・教育実践をより効果のあるものとするために、小中が統一して取り組むことと合わせて、連携しながら各校独自に取り組むこと、新たに協力していくべきことなどを、学校教育目標と関連させながら具体化を図り実践すること。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書
【推進地区】

都道府県名	山口県	番号	8
-------	-----	----	---

推進地区名	下関市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組の内容

1. 重点課題

(1) 学力向上に向けた取組の推進について

学力向上は、下関市の最重要課題である。学期ごとの「学力向上プラン」の見直しなど、全教職員で課題と目標を共有しながら、組織的に取り組むことが必要である。

①学習指導の充実

・「やまぐち学習支援プログラム」の活用と授業構成の工夫

②学力調査の活用

・調査結果における課題共有と重点取組事項の明確化

③「学力向上プラン」の活用

・授業改善へつながる「学力向上プラン」の作成と評価サイクルの見直し

④家庭学習の充実

・学力向上等推進委員会で整理した「学びの習慣化」についての資料を活用

(2) 教職員の指導力の向上

研究授業後に共有した課題において、その課題解決の方策を明確にする研究協議を行い、校内研修をより深化させていくことが求められる。

①全校体制による校内研修の推進（「校内研修活性化へのチャレンジ」の活用）

・積極的な授業公開（「互見授業のススメ」「下関スタンダード」の活用）

・共通取組事項を明確化した授業評価等の実施

・かかわり合いのある授業の推進（『「かかわり合い」のある授業のススメ』の活用）

②開かれた校内研修の実施

・指導主事、学力向上推進リーダー・推進教員、教育力向上指導員等の積極的活用

・小中連携による出前授業、合同研修会等の実施

③校外研修の積極的活用

・キャリアステージや自己目標等に応じた研修会への参加、研修内容の確実な還元

・「わくわく教師塾 i n 下関」等自主研修会の実施

(3) 組織力の向上

小学校と中学校、小学校同士、さらに地域や保護者とも学校の課題を共有し、コミュニティ・スクール等の仕組みを活用して学校の組織力向上に努めていく必要がある。

①評価を生かした組織的取組

- ・重点課題解決に向けた共通取組事項の明確化と確実な実施
- ・学校運営協議会等と連携した教職員、保護者、地域間での学校目標及び課題の共有

②校種間連携の推進

- ・小中共通課題に応じた中学校区ごとの小中連絡協議会の活性化
- ・幼保小、小中、中高のなめらかな接続に向けた教職員研修の実施

③「新しい学校づくり推進委員会」の開催

- ・「学力向上部会」「小中一貫教育部会」「歴史部会」の3部会設置

2. 重点課題への取組状況

(1) 学力向上に向けた取組の推進

①検証・改善サイクルの確立と学力向上プランの活用

今年度の下関市学力向上プランにおいて、「指導と評価のサイクルの確立」を掲げ、各学校に年間2回の検証・改善サイクルの実施を求めている。

そこで、4月の全国学力・学習状況調査及び下関市学力調査（小学校5年生、中学校2年生対象）から、現状及び課題を把握し、各学校において学力向上プランを作成した。

下関市教育委員会としては、各学校の状況を把握し、下関市全体の結果を示すとともに全市的な傾向や特徴を分析した。各学校へは下関市の教科ごとの結果や設問ごとの結果、成果・課題がみられる問題の情報提供を行った。併せて、課題の解決に向けて、日々の学習指導の改善や指導と評価のあり方についての方向性や手立てを示した。

この学力向上プランに基づいた取組を推進し、10月末には山口県学力定着状況確認問題（小学校3年生～6年生、中学校1・2年生対象 小学校5年生は国語・社会・算数・理科、中学校2年生は国語・社会・数学・理科・英語、他の学年は国語、算数・数学）により、取組の評価と改善状況の検証を行い、学年の後半に向けた学力向上プランの見直しを進めた。

②やまぐち学習支援プログラムの活用

4月の全国学力・学習状況調査及び下関市学力調査、10月末の山口県学力定着状況確認問題の結果から、課題のある問題については、各学校において授業や朝学等で、やまぐち学習支援プログラムの「やまぐちっ子学習プリント」を活用して学力の定着を図った。また、同プログラムの「学期末評価問題」を実施して結果を入力することにより、山口県の平均との比較や定着状況の確認を行い、課題を明確化した。

(2) 教職員の指導力の向上

① 全校体制による開かれた校内研修の推進

これまで下関市教育委員会が作成し活用を推進してきた「校内研修活性化へのチャレンジ」や「互見授業のススメ」により、校内研修が改善され、各学校では「互見授業」が定着してきている。

全教員が、学期に1回は互見授業を実施したり、年間1回は授業公開をしたりする学校も増えてきている。また、学力向上推進リーダー・推進教員が配置されている学校においては、来校日にあわせて互見授業を行い、ミニ研修会での指導、助言により授業力の向上へつなげている。

また、下関市教育委員会による研修支援訪問や学校からの要請訪問により、研究授業やワークショップ型の研究協議を行い校内研修の充実を図っている。

授業においては、下関スタンダード授業の基礎・基本で示された3つの視点（Ⅰ子どもの実態を踏まえた授業 Ⅱかかわり合いのある授業 Ⅲ見通しと振り返り（評価）のある授業）を意識した授業構成により、授業改善を進めている。

② 校外研修の積極的活用

下関市では中核市研修により本年度、55講座を開設し実施した。キャリアステージや自己目標等に対応した講座・講師により、研修の充実を図るとともに受講者へはアンケート実施等により研修内容の確実な還元を求めた。

また、自主研修会「わくわく教師塾 in 下関」を年間11回開催し、延べ300名近くの参加があった。市内の先生方を中心に講師をお願いし、各教科や道徳、ICT機器の活用といった明日からの授業実践にすぐに役立つ内容のほか、教育課程についての内容など各講師の専門分野で講義をいただき研修を行った。また、博物館の学芸員にも講師をお願いし、地域の歴史について学ぶ機会も提供した。

(3) 組織力の向上

① 評価を生かした組織的取組

学校運営協議会等において学校の目標や課題などの情報提供を行い、保護者や地域と連携した取組を推進した。各校区の担当指導主事も必要に応じて加わり、情報提供などを行った。

② 校種間連携の推進

各学校から管理職や教務主任、研修主任、学力向上担当などが出席し、中学校区学力向上連絡協議会を開催した。同じ中学校区にある小学校と中学校で、全国学力・学習状況調査や山口県学力定着状況確認問題の結果を共有し、連携して課題解決につなげていこうとするもので、この会の運営は各学校を担当する指導主事で行った。また、指導主事は担当校に対して、学力調査等の分析結果を提供し、指導、助言を行った。

これまでに下関市教育委員会が主催して行ってきた小中連携教育研修会の成果として、各中学校区で合同研修会が行われるようになり、子どもたちを軸として9年間の学びをつなぐ連携した取組が進められている。

推進校である安岡校区においても、7月16日に安岡小学校で学力向上連絡協議会を開催し、全国学力・学習状況調査の結果から読み取れる課題の共有やこれまでの安岡校区における学力低迷の背景等について協議し、今後の取組内容の検討を行った。

③「新しい学校づくり推進委員会」の開催

学力課題である活用力の育成を図る「学力向上部会」、小学校における学びを中学校へつなぐ「小中一貫教育部会」、地域の歴史を学び、ふるさとを誇りに思う心を育てる「歴史部会」の3部会を設置。

「学力向上部会」では、山口県教育委員会の授業づくり拠点校研修会（活用力向上事業）にあわせ、小学校の国語、算数、中学校の国語、数学、理科で部会を開催し、活用力についての共通理解及び授業についての指導案の検討を行った。

10月から11月にかけて、市内の小・中学校5校で同研修会を実施した。

（4）調査研究にあたっての推進校への関わり

本調査研究にあたっては、6・9月にはそれぞれ安岡小学校、中学校において下関市教育委員会による研修支援訪問を実施し、研究授業、研究協議を行った。

7月には推進校指定の決定を受け、山口県教育委員会及び下関市教育委員会による研究概要等の説明を行った。

11月には、山口県教育委員会及び下関市教育委員会で両校へ訪問し、授業参観及び研究協議を行った。また、11月末の小中合同研修会において研修視察の報告が行われ、下関市教育委員会からも出席した。

12月には、すべての取組についての実施計画、実践状況、今後の課題を一覧にし、下関市教育委員会と両校の校長及び担当で中間評価を行い、今後の取組の方向性を確認した。

1月末には安岡小学校を会場に、成果発表会を実施。関係校の教職員を含め、県下全域から60名以上の参加を得て開催され、指導者として山口県教育委員会、下関市教育委員会の指導主事も参加した。

3. 調査研究の成果の把握・検証

（1）山口県学力定着状況確認問題の結果から

本市の子どもたちの学力状況について、平成24年度から改善の兆しが見られ、平成25年度には、小・中学校ともに半数の教科で全国の平均正答率を上回る状況であった。

次ページの表は、平成24年12月に実施した山口県学力定着状況確認問題と平成25年10月の同問題について、小学校4年生から中学校2年生までの下関市の平均正答率と山口県の平均正答率の差及びその変化を表したものである。

国語	県との差 H24 12月	県との差 H25 10月	差の変化
小学4年	-1.4	-0.1	+1.3
小学5年	0.4	-3.2	-3.6
小学6年	-4.5	0.7	+5.2
中学1年	-1.3	-2.0	-0.7
中学2年	-1.7	-1.7	±0

算数・数学	県との差 H24 12月	県との差 H25 10月	差の変化
小学4年	-1.0	1.3	+2.3
小学5年	-1.4	-0.4	+1.0
小学6年	-1.0	0.7	+1.7
中学1年	-1.2	-1.4	-0.2
中学2年	-1.7	-1.9	-0.2

小学校では、現4年生～6年生において、5年生の国語を除き、山口県の平均正答率との差が小さくなっている。

特に右表の4年生の算数と6年生の国語、算数では平成24年の12月時点では山口県の平均正答率を下回っていたが、平成25年10月には山口県の平均正答率を上回る結果を残している。

中学校では、山口県の平均正答率を下回る状況であり、平成25年10月には、中学校2年生の国語を除き、更に差が開く結果となった。

このような結果の背景の1つとして、小・中学校における授業改善の差が考えられる。

右表の山口県学力定着状況確認問題の児童生徒質問紙の結果を見ると、「授業で話し合う活動をよく行っていると思う」という質問に肯定的に回答した小学生の割合は、どの学年も85%を超えており、中学生や同じ学年の山口県の割合よりも高くなっている。

逆に中学生では、最も高い中学校1年生でも75.5%であり、山口県の中学生の値よりも下回っている。

また、「学習内容を振り返る活動をよく行っていると思う」という質問に肯定的に回答した児童生徒についても、小学生は75%を超えているが、中学生は最も高

小4算数	H24 12月	H25 10月	
下関市	60.3	57.2	
山口県	61.3	55.9	
差	-1	1.3	+2.3

小6国語	H24 12月	H25 10月	
下関市	53.9	57.3	
山口県	58.4	56.6	
差	-4.5	0.7	+5.2

小6算数	H24 12月	H25 10月	
下関市	57.3	57.9	
山口県	58.3	57.2	
差	-1	0.7	+1.7

「授業で話し合う活動をよく行っていると思う」
H25年10月実施
(どちらかといえばも含め肯定的に回答したもの)

	下関市	山口県	差
小学校4年	85.4	85.1	+0.3
小学校5年	86.9	86.7	+0.2
小学校6年	89.9	87.8	+2.1
中学校1年	75.5	79.2	-3.7
中学校2年	68.2	77.7	-9.5

い中学校1年生で65.1%にとどまっております。学習内容の振り返りについても、中学生に比べて小学生の方が高い割合を示している。

「学習内容を振り返る活動をよく行っていると思う」
(どちらかといえばも含め肯定的に回答したもの) H25年10月実施

中学校において、学力向上に向けた取組を進めていく上での課題の1つとして、授業改善が進まない状況が挙げられる。中学校の場合、授業規律の面でなかなか授業の改善に踏み切れず、一斉授業が中心となってしまうといった実状がある。

	下関市
小学校4年	75.9
小学校5年	80.2
小学校6年	80.7
中学校1年	65.1
中学校2年	50.6

しかしながら、こういった状況を改善していくためにも、小・中学校の連携を1つの柱として取組を進め、学習と生徒指導を両立させていく必要がある。

今年度、下関市教育委員会では「下関スタンダード 授業の基礎・基本vol. 2」を発行し、教員の授業水準向上に向けた一層の環境づくりを進めた。前年度に作成した「下関スタンダード 授業の基礎・基本vol. 1」とあわせて、授業における3つの視点を軸とした一層の授業改善と学力の向上に努めていきたい。

4. 今後の課題

- 今年度は4月と10月の調査結果を活用して、学力向上プランに基づき年間2回の検証・改善サイクルの確立を推進してきた。やまぐち学習支援プログラムには学期末評価問題や単元毎の評価問題があり、結果を入力して、山口県の結果との比較から自校の課題を把握することができる。このようなシステムも活用し、検証・改善サイクルの充実を推進していきたい。
- 下関市教育委員会では、山口県教育委員会とともに「若手育成1000日プラン」を推進している。これは新規採用の初任者を3年間で育てていこうという取組である。指導主事が毎月1回は、担当校の初任者の授業を参観して、管理職や担当教員とともに指導助言を行っている。このような組織的な取組により、教員の資質向上に努めていきたい。
- 下関市では平成24年度末に市内の全小中学校74校をコミュニティ・スクールに指定した。今年度は周知と熟議をテーマに、各学校で様々な取組がスタートしている。8月には下関市での全国コミュニティ・スクール研究大会の開催を控え、一層の取組の充実が期待される場所である。今後はこの仕組みを活用して、更に小中連携を進めるとともに、子どもたちを軸とした9年間の学びを推進し、確かな学力の定着に努めていきたい。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書
【推進校】

都道府県名	山口県	番号	8
-------	-----	----	---

推進校	山口県下関市立安岡小学校
-----	--------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

本校の中学校区は、一小一中の校区で、小・中学校の長期的なつながりが確保できるという状況がある。こういった利点を生かし、学力調査等の結果を踏まえた学習指導の充実や学校状況の改善に向け、小中連携を一つの視点として、以下の研究主題を設定した。

小中連携による学習指導の一層の充実と学習習慣の確立による学力向上
～学力の定着をめざす授業づくり～

2. 重点課題への取組状況

(1) 小中連携の取組

① 児童生徒の交流について

ア 合同授業の実施

- 小学校6年生が中学校に訪問し、中学校1年生と合同授業の実施（2月）

イ 小学校の補充学習に中学生の支援

- 安岡小学校コミュニティ・スクール学校応援団に学習支援の中学生を登録
- 1月6日（月）、7日（火）9:00～11:00
小：97名、中：21名

② 教員の交流について

ア 小中連携協議会の実施（校長、教頭、教務、研修、学力向上担当 両校で計10名で協議を実施）

- 第1回小中連携推進会議〈5月28日（火）

於：安岡小）

- ・全国学力・学習状況調査等のこれまでの学力調査の結果報告
- ・児童生徒の学習、生活の様子についての情報交換
- ・今後の小中連携の方途についての協議

- 第2回小中連携推進会議〈7月8日（月）於：安岡中）

・平成25年度小・中学校共通研究テーマ設定

「小中連携による学習指導の一層の充実と学習習慣の確立による学力向上」

・学力向上、授業交流、学習環境、生活指導、心の教育、中1ギャップ解消、小中交流、地域交流、健康、保健の10の研究グループで研究を推進

- 第1回合同研修会（夏季小・中合同研修会〈8月19日（月）於：県立下関武道館会議室〉）

・小中連携の共通認識と小・中別の学力状況の現状と課題の把握

・指導者：山口大学教育学部准教授 松本清治 様

講義「小中連携を基盤とした学力向上の在り方」

・第1回研究グループ別協議

- 第2回合同研修会（授業研究会〈11月15日（金）於：安岡中〉）

・指導者：山口大学教育学部准教授 松本清治 様

- 第3回合同研修会（視察報告会〈11月27日（水）於：安岡小〉）

・鳥取県鳥取市立湖南学園小学校・湖南学園中学校

・広島県府中市立府中小学校・府中中学校

・第2回研究グループ別協議

- 第4回合同研修会（授業研究会〈1月22日（水）於：安岡小〉）

・校内での成果発表会 ・指導者：宇部市立琴芝小学校 教頭 兼石淳一郎 様

安岡小・中学校連携イメージ図



- 成果発表会〈1月31日（金）於：安岡小〉
 - ・授業研究協議会
 - ・成果発表会
- イ 定期的な公開授業及び乗り入れ授業
 - 計画的に互いに公開授業を見学
 - 中学校教員による小学校での授業の実施
 - ・本年度、英語、理科で実施〈11月26日（水）～28日（木）〉
- ウ 小学校教員による中学校の補習の指導（チャレンジ学習会）
 - 8月5日（月）～9日（金）の一週間、小学校教員27名が中学校に出向き、中学校1年生の補習の指導を実施
- ③ 9年間を見通した教育課程の編成
 - ア 9年間の学力向上プランの作成
 - 小・中学校、全教科による学力向上プランを作成
 - 国語、算数・数学の詳細な学力向上プランを作成
 - イ 家庭学習の手引きの作成
 - ウ 全授業、全教員による共通取組
 - めあての提示・・・黒板に必ず明示する。
 - 音読・・・重要な語句や文章を全員で声に出して確認する。
 - 授業評価・・・自分の言葉で文章でまとめる。
「何字～何字でまとめなさい。」など工夫する。
 - エ やまぐち学習支援プログラムの活用
 - 朝学習、昼休み、授業、放課後学習、家庭学習の場面で実施
 - 「やまぐちっ子学習プリント」、「授業の工夫改善に向けて」、「学力の状況確認のために」、「全国学力・学習状況調査過去問題」の実施
- ④ コミュニティ・スクールからのアプローチ
 - ア 補習等における地域人材活用
 - 大学生等による放課後学習の補助
 - イ 本の読み聞かせ、技術指導、学習支援等の取組

(2) 校内研修等の取組
 (基礎・基本の確実な習得と定着〈学力に課題を抱える児童のレベルアップ〉)

本校では、研修主題を

「確かな学力を培う学習指導の工夫
 ～基礎学力の定着をめざして～」

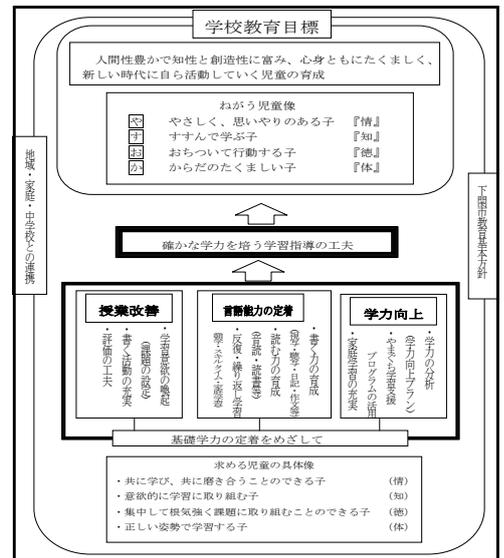
とし、研修を進めている。

① 確かな学力を支える日々の授業づくり（授業改善）

- 授業評価（振り返り）の実践
 - ・提示した「めあて」に沿った振り返りを行う。
 - ・授業や単元の終わりに、振り返りをノートに記入し、次時に発表することで、全体にひろげる。
 - ・めあての横に、◎（よくわかった）、○（わかった）、△（わからないところがあつた）を書く。
 - ・授業後、挙手による振り返りを行う。
 - ・国語では、その日の授業でわかったことや考えたことを短文にまとめる。
 - ・4行（行指定）、2文で書くなど、振り返りを行う。（高学年）

② 言語能力（書く力・読む力）の定着

- ア 既習内容の定着をめざした取組
 - スキルタイムの実践
 - ・授業の導入における九九の復唱や100マス計算（＋－×）の実施
 - やまぐち学習支援プログラムや長野県クリア問題の活用
 - ・朝学や宿題で活用（学習の定着を図る）
 - ・「書くこと」に着目した重点的な取組（複数回行う）
- イ 「書く力」の育成
 - 作文指導（週1回）
 - ・行事ごとに作文を書くようにする。
 - ・連絡帳に毎日1～2文で日記を書く。



- ・「テーマを決めて」、「常体で書く」、「書き出しの工夫」、「～の言葉を使う」、「反論文を書く」、「題名の工夫」などの課題に沿った作文を書く。

- よく書けた作文の紹介を行う。(意欲付け)
- 短文づくり(連絡帳に毎日書く)
 - ・ 比喻
 - ・ 新出漢字を使う。(主語・述語も必ず入れる)
- 視写を取り入れた実践
 - ・ 国語の教科書の文や詩を書き写す。
 - ・ 授業中、算数の問題などをノートに書き写す。
 - ・ 朝学の時間に詩を書き写す。
 - ・ 書写の時間に、うつしまるくん(視写ワーク)でスピードチェックする。
- 聴写を取り入れた実践
 - ・ 授業のめあてや連絡帳の内容などを聞いて書く。
 - ・ 算数の問題を聞いて書く。
- ノート指導
 - ・ ノートを書くきまり(日付、ページ、めあてや大事なところを線で囲むなど)を統一する。
 - ・ マスの空け方や改行の仕方を確認する。
 - ・ 教師が事前に、子どもと同じノートで書いてみる。
 - ・ 毎日、子どものノートを点検する。
 - ・ 自分の考えや答えの説明を書く時間を確保する。
 - ・ 「こう思う。なぜなら・・・」というように、パターンを教えて書く。
 - ・ 理科では、予想と結果を書く。



ウ 「読む力」の育成

- 音読の取組
- 家庭学習用の音読カード(全学年)
- 読書推進の手立てや工夫
 - ・ 毎週金曜日の朝学の時間に10分間集中して読書を行う。
 - ・ 読書カードに記入することで、めあてを決めて、冊数やページ数に挑戦する。
 - ・ たくさん読んでいる児童を紹介する。図書館に掲示する。
 - ・ 読書カードが1枚終わるたびにスタンプを押したり、シールを貼ったりする。
 - ・ スピーチなどで、おススメの本を発表する。
 - ・ 感想文や感想画を通して、本の紹介を行う。
 - ・ 読書の時間の確保を行う。
 - ・ 読書の時間に「今日は民話を借りる日」、「昔話を借りる日」など、借りる本のジャンルを指定して、いろいろな種類の本にふれる。
 - ・ ボランティアグループ「ねぎぼうず」による朝学の時間を使った本の読み聞かせの実施(月・金曜日)
 - ・ 年1・2回の読み聞かせ会の実施(学年ごと)
- 選書会



エ その他

- 放課後の補習学習の実施
 - ・ 学習の定着を図るために、各担任や本校教諭、大学生が放課後30分程度個別指導を行う。
- 90日元気手帳の実施
 - ・ 基本的な生活習慣(食事・運動遊び・読書)の定着



(3) コミュニティ・スクールによる地域と協働した学習支援

本年度、コミュニティ・スクールとしてスタートした。学校運営協議会委員27名(年間5回協議会開催)、学校応援団80名で学校を支えている。学校応援団は3部会(学習・環境・安全に関するサポート)で組織している。地域・保護者と一緒に行う友田川氾濫想定避難訓練など、新規事業を開発し、年間計画を作成している。

月	開催日	事業	主な内容
4	4月30日	第1回学校運営協議会	・委嘱状交付・CS概要説明・学校運営・教育活動方針説明・会長、副会長選出・学校運営についての協議・学校への期待、願い協議・友田川氾濫想定避難訓練について、組織づくりについて
	通年	本の読み聞かせ	「ねぎぼうず」の読み聞かせボランティアの活動。月・金曜の朝学時間教室で読み聞かせ実施。本の修理や図書室の整理整頓等
5	通年	ホテル朝学活動	親ホテル探り・産卵・朝学・いしな探り・放流等
6	6月16日	友田川氾濫想定避難訓練	①通報訓練、②児童の保護者引き渡し訓練(親と教員の連携)
6	6月20日	第2回学校運営協議会	友田川氾濫想定避難訓練反省・安岡小学校コミュニティスクール運営案編及び構成図策定・学校応援団組織・コーディネーター任命・全国学力学習状況調査報告・学力向上についての事業提案
7	7月～9月	学校応援団募集	保護者31名、地域8名登録
	7月	水泳指導監視の補助	学校応援団33名が関わり活動
8	8月10日	パソコンと遊ぶ教室	安岡公民館にて、5・6年生30名が参加。
	9月26日	水鉄砲づくり(園工クラブ)	地域の講師を招いての実習
9	9月26日	第3回学校運営協議会	学校評価結果報告及び今後の取組・学校応援団の登録状況報告及び今後の専断について、学力向上指定校に対するCSとしての関わり方について協議
11	11月22日	ホテル朝学20周年記念式典 ホテル放流儀式 ミニ門松づくり	本校のCSメイン事業であるホテル朝学の20周年式典の開催。友田川にホテルの放流
12	12月12日	第4回学校運営協議会 ミニ門松づくり	地域の講師を招いての実習
	12月12日	第4回学校運営協議会	山口県学力定着状況確認問題の結果・各研修会報告・学校応援団学習支援についての熟議
1	1月6・7日	5・6年生対象の補充学習	安岡中学生21名が駆けつけ、本校教員約25名とともに、小学生97名に学習を教えた。
2	2月13日	第5回学校運営協議会	予定

① 学校運営協議会における学力の現状把握

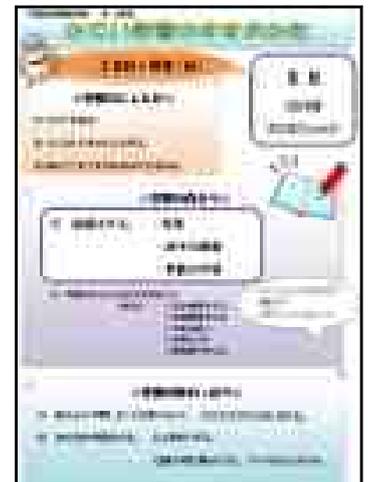
- 全国学力・学習調査の結果分析報告
- 本校の課題について協議

- ② 学校応援団による学習支援
 - 補習の補助活動
 - ・中学生、高校生、大学生による補習補助
 - ・地域の方々の巡回指導
 - プールの監視補助
 - ・保護者応援団による活動
 - 家庭科ミシン学習の補助
 - クラブ活動での外部講師
 - ・茶道、水鉄砲、ミニ門松
- ③ 学校応援団による読書支援活動
 - 定期的な読み聞かせ
 - ・月曜日、金曜日の朝学習での読み聞かせ
 - 図書修理活動
- ④ 学習に関わるコミュニティ・スクールの事業
 - パソコンと遊ぼう教室
 - ほたる飼育活動



(4) 家庭との連携

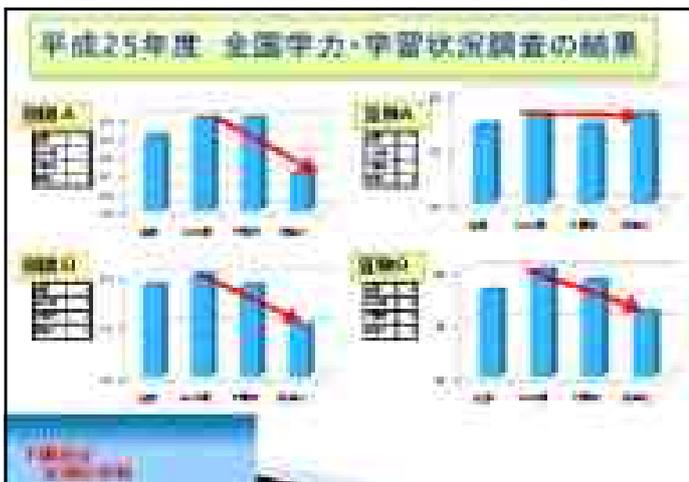
- ① 家庭における学習習慣の改善に向けた取組
 - 学校から文書を配付
 - ・夏休み前と2学期に2回、合計3回配付した。家庭学習の仕方や分量などをわかりやすく伝えるために数値を使い目標を設定しやすくした。また、前年までと比べ、夏休み中の宿題を増やし、夏休み前にその説明を行った。
 - 音読、漢字、計算の3点セットの学習課題を提示した。
 - 「家庭学習のススメ」を配布し、家庭学習の必要性や学習時間の目安、保護者の関わり方を示し、支援を要請した。
- ② 家庭学習の手引きの作成
 - 家庭学習の手引きを作成、家庭学習の進め方として、学習時間、学習環境、内容、家庭での支援の場面を示した。



3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 学力調査から

① 平成25年度全国学力・学習状況調査



今年度の調査結果は、算数Aは県平均正答率と同程度であったが、他の区分では、県平均正答率を5～7%下回っていた。このような状況は、過去3年間においても同様で、特に学力に課題がある児童が多く、それらの底上げが課題の一つである。

また、児童質問紙の集計結果から、平日に読書を「全くしない」と答えた児童が3分の1の32%もいた。「10分以下」と答えた児童を合わせると、54%と半数以上の児童に、読書習慣に課題があると言える。

市の正答率と比較して10%以上低かったものや正答率5割以下のものをあげると次のようになる。

国語

- ・漢字を正しく書くこと、読むこと。
- ・文と文の意味のつながりを考えながら、接続語を使って内容を分けて書くこと。
- ・目的や意図に応じ、複数の内容を関係付けながら自分の考えを具体的に書くこと。
- ・資料を読み、わかったことを引用して書くこと。
- ・必要な内容を適切に引用して書くこと。
- ・推薦文を比べて読み、推薦している対象や理由を捉えたり、読み方の違いを捉えたりすること。

算数

- ・表から数値を適切に取り出して二つの数量関係が比例ではないことを記述すること。
- ・単位量あたりの大きさなどに着目して、二つの数量関係の求め方を記述すること。
- ・割合が同じで基準量が増えているときの比較量の大小を判断し、その判断の理由を記述すること。
- ・示された分け方で二つの三角形の面積が等しくなることを記述すること。

国語では、主に「書くこと」に課題があり、算数でも、記述式の問題の正答率が低かったことから同様のことが言える。また、正答率の低かった問題を分析していくと、問題を読み取ることができなかつたと思われるものが多かつたことから、「読むこと」にも課題があることがわかる。このことは、①で述べた読書不足にもつながっていると考えられる。

- ② 山口県学力定着状況確認問題から（平成25年10月30日実施）
採点終了時点で本校独自に学年ごとの結果を全教職員で分析した。
各教員の感想や他学年の採点者（全員が関わる）からの意見、分析を以下のようにまとめた。

〈良かった点〉

- 無回答率が随分減った。→ 関心・意欲が高まったのではないか。
- 問題を解くスピードが速くなった。→ ドリル練習の成果（慣れ）
- 5年算数では、資料から情報を読み取り、まちがいを指摘し、説明することができていた。（弱点の克服・・・授業での集中的な取組の成果）
- 計算のミスが減少した。
- 概数を理解しているなど、6年生活用問題が比較的正答率がよかった。

〈課題〉

- 比較はできるが、結論が書けない。→ 自分なりの意見をもっていない。
- 問題をよく読んでいない。文章や資料を読み取る力を育成するため、授業の中での具体的な指導を充実していく必要がある。
- 授業で体験や操作活動を取り入れることで、知識や理解の定着が図れる。
- 面積などの量感をもたせる。
- 国語は、漢字やローマ字が定着しておらず、辞書活用にも課題がある。

〈県平均との比較〉

		学力の状況(山口県平均との比較)							
		H24. 12 やまぐち学習支援プログラム 学期末評価問題	H25. 3 やまぐち学習支援プログラム 学期末評価問題	H25. 4 全国学力・学習状況調査		H25. 7 やまぐち学習支援プログラム 学期末評価問題	研究期間	H25. 10 山口県学力定着確認問題	H25. 12 やまぐち学習支援プログラム 学期末評価問題
6年	国語	-3.5%	-6.1%	国語A -3.8%	-5.9%	飛躍 →	+2.0%	+5.0%	
	算数	+1.8%	-2.6%	国語B -5.1%	-1.3%		+11.0%	+8.1%	
5年	国語	-4.2%	-7.7%	向上 →	躍進 →	-6.9%	-2.1%	+2.5%	
	算数	-5.5%	-6.1%			-3.1%	+0%	-2.9%	
4年	国語	-8.1%	-4.0%	向上 →	向上 →	-1.4%	+2.9%	+0.9%	
	算数	-5.1%	+5.2%			+8.8%	+6.8%	+2.6%	
3年	国語	安定 →				+7.9%	安定 →	+4.7%	+3.3%
	算数					+3.8%		+3.1%	+7.0%

前の表で示しているとおおり、どの学年も飛躍的に向上した。本校教員が感じている「小中連携」と「研修」の成果と思われる内容は以下のとおりである。

小中連携での成果（学力調査の結果から見る）

- 授業の最後の「授業評価」で、条件を付けて自分の言葉で書くことを取り入れた成果は大きい。書くことへの抵抗がなくなり自分の言葉で表現する力が随分と伸びた。
- 「音読」の取組が活発になり、どの教室でも、大きな声で唱和する姿が見られた。
- 授業の最初に「めあて」を前面に示し、子どもたちに意識付けをしていく取組は定着してきた。

研修の成果

- 個に応じた指導や放課後学習の充実が図られた。
- わからないところをそのままにせず、補充学習で徹底的に復習を行った。
- クリア問題（長野県版）の活用は有効であった。
- ノートの書き方や読んで理解する方法を丁寧に指導した。
- スピードをつける計算ドリルの実践
- 学習意欲の向上を図る実践

4. 今後の課題

山口県学力定着状況確認問題では、無解答が減少した。これは、教職員一丸となって、学力向上に向けた授業改善、研修に取り組んだ成果である。家庭学習についても保護者の理解・協力のもと、児童生徒の意識が高まってきた。現在の姿勢で意識をもち、研修に励むことで徐々にではあるが、確実に学力は定着していくであろう。

今後、強化すべき取組としては、まず、「読み取る力」の育成である。必要な情報を的確に読み取ることができるように、**授業改善に取り組む**ことが大切となる。

次に、「量感」の習得である。説明だけでは十分な理解は図れない。実際に事物に触れ、操作するなど、**体験的な活動**が必要となる。

さらに、自分の言葉で書くことはできるようになったが、条件が加わると書けなくなる児童が少なくない。適度な負荷をかけ、自分の思いや考えも与えられた条件の中で適切に表現する力、的確な答えを見つけ出す**考える力**の育成に取り組む。

これらを授業改善の視点として、明確に学力向上プランに位置付けるなど、計画的・意図的に仕組んでいくことが大切である。

また、小テスト・単元テストの効果的な活用・実施とともに、評価の充実を図り、児童の到達度の客観的な分析に基づいた組織的な取組こそが、確実な学力の定着に結びつくと確信している。

一方、小中連携の取組では、次のような成果と課題が明らかになった。

- ① 小・中学校の教員が、学習指導・生徒指導上の課題を共有し、自分たちの問題だと受け止めて、目標を設定し、取組を進めた。一緒に研究を進めることで、意識改革につながっている。
- ② 乗り入れ授業において、小学生が中学校の先生に指導を受けることで、中学校の先生の人となりを知ることができ、信頼関係が生まれた。
- ③ 小学生と中学生の合同授業により、小学生は、中学生の質の高い作品や行動のすばらしさに感動し、希望の念や安心感が生まれている。
- ④ 9年間の「学力向上プラン」は今後の教員連携に役立つものとして成果があった。今後は「学習プラン」「生活プラン」などを作成して一覧表にまとめ、地域や家庭に配付し、地域ぐるみで共通理解を図り、取組を進めたい。
- ⑤ 「小中連携コーディネーター」を各校の校務分掌へ位置付け、コーディネーター（リーダー）を中心に更なる活性化を図りたい。

その他、次の事柄を解決できると考えている。

- ・小学生の中学校への不安が解消される。
- ・中学生の優しさが表面に表れる。
- ・子どもの活動が生き生きする。
- ・学習意欲が向上し、理解が進む。
- ・教師の指導力が向上する。
- ・地域や保護者が学校に対して協力的になる。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進校】

都道府県名	山口県	番号	8
-------	-----	----	---

推進校名	山口県下関市立安岡中学校
------	--------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

一小一中校区の特性を生かし、学力調査等の結果分析を通して、学習指導の工夫・改善に向け、小中連携を視点に以下の3つの取組を実践した。

- (1) 学習指導の一層の充実のための小中連携
- (2) 学力水準底上げのための取組
- (3) 学力向上の基盤づくりのための家庭・地域との連携

2. 重点課題への取組状況

(1) 学習指導の一層の充実のための小中連携

① 学力向上プランの工夫改善

中学校では、小学校の「書く力」「読む力」に着目した学力向上プランに習い、国語科と数学科において特化したプランを作成し、小学校では、中学校の例に習い、全教科の学力向上プランを作成した。小中互いに学力向上プランの見直し、改善を行い、指導内容、指導方法の共有化を図った。

② 家庭学習の手引きの作成

発達段階に合わせた家庭学習の手引き「学習の進め方」を作成し、全生徒、全家庭に配布した。教科の特性に応じて学習の仕方やノートのとめ方等を示すとともに、読書習慣の定着に向けた取組の一つとして、「学習の進め方」の中に学年別参考図書一覧も掲載し、読書記録の書き込みができるように工夫した。

③ 授業改善のための3つの取組

- ・めあての提示…毎時間、黒板に必ず明示する。
- ・音読…重要な語句や文章を全員で声に出して確認する。
- ・授業評価…自分の言葉で文章にまとめる。

④ やまぐち学習支援プログラムの活用

朝学習、昼休み、授業、放課後学習、家庭学習の場面で活用した。

⑤ 教員の交流

ア 中学校教員による小学校への乗り入れ授業

中学校の教員が小学校に出向き、授業を実施。中学校の教員が教科の専門性を生かした授業を計画し、小学校の担任教諭と打ち合わせを行い、理科と英語科の授業を行った。

安岡小・中学校連携イメージ図



イ 中学校夏季補習授業での小学校教員の指導

安岡小学校からのべ27名の教員が参加協力し、中学校教員と共に指導にあたった。小学校教員の協力を得ることにより、きめ細かな個別指導が可能となったことに加えて、小中教員による互いの指導方法の確認、共有ができ、実践的研修としても有意義であった。



⑥ 生徒・児童の交流

ア 小学校6年生が中学校で模擬授業体験

イ 中学生による小学校補充学習への協力

中学生21名が小学校に出向き、小学5・6年生97名の補充学習支援にあたった。小学生は適度な緊張感の中で学習に集中し、中学生は自分の成長を自覚するよい機会となった。



(2) 学力水準の底上げのための取組

① 授業改善の取組

ア 公開授業と研究協議

校内研修において、全教員が言語活動の充実に焦点をあて、一人一研究授業を実施した。研究授業は、学力向上推進リーダー来校日(毎週木曜日)に計画し、授業後の研究協議で助言を受けた。また同教科担当教員は、授業参観(互見授業)を必ず行うこととした。

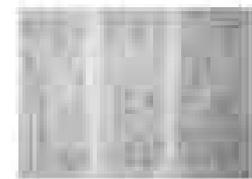


イ 「ねらい」と「振り返り」の明示

授業者は、カード等を活用し、授業の「ねらい」と「振り返り」を明確にした。

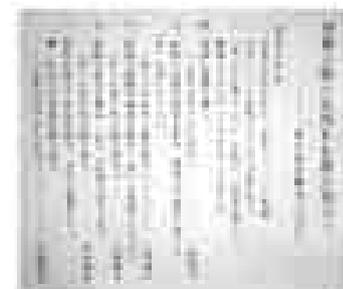
「ねらい」のカードの横に本時のねらいを明記し、授業中に生徒が絶えず意識できるようにした。生徒は本時で学ぶことを理解し、目的を明確にして授業に臨むことができた。

「振り返り」のカードは、本時の学習内容をまとめ、確認することに有効であった。生徒は、毎時間、または単元毎に自己評価を自分の言葉でまとめて書いた。生徒の自己評価をもとにさらなる授業改善に向けて、教員一人ひとりが自己研鑽を重ねており授業力向上に向けて、校内研修が活性化した。



ウ 「見通し」のある授業

生徒に単元全体の学習計画「見通し」をもたせる授業を展開した。単元の第1次に、単元の学習計画「見通し」を説明し、各授業での「ねらい」を示した。これにより、生徒は各授業をつながりのあるものとして捉えることができ、目的を明確に、また安心して授業に臨むようになった。



エ ワークショップ型研修

年に2回、全教員でワークショップ型研修を行った。教員一人ひとりが、研究協議によって互いの経験や知識を共有し、授業づくりに向けて視野を広げていった。また、授業改善の視点(「言語活動の充実」)を明確にすることにより、焦点化された深みのある研究協議となった。グループ別の発表やその後のシェアリングも含め、授業改善に向けて教員の意識が高まり、日々の授業実践に生かされていった。

② 学習習慣の定着と意欲化に向けた取組

ア 朝学習の導入

1学期は月～金まで、8:15から朝読書を実施した。2学期は9月より月・火・金は朝読書、水・木を朝学習に変更(教科は国・数)し、さらに、10月中旬より月・金は朝読書、火・水・木を朝学習と拡大した。教科は国・数・社・理・英を順に実施した。



なお、実施した朝学習の内容は、小テストや単元テストで定着度を確認した。朝読書に関しては読書記録を作成し、学期に1回、教室内に掲示した。

イ 個に応じた指導の充実〈自学自習教室・質問教室〉



昼休みに、自主学習を希望する生徒のために、自由に入って静かに学習できる自学自習教室を開設した。小学校段階からの「やまぐち学習支援プログラム」学年別問題を準備し、生徒は自分の力にあった問題を選択し、学習できるように環境を整えている。

定期テスト前には質問教室を各学年で開催した。集まった生徒一人ひとりに、教員が放課後1時間程度、それぞれの状況に応じた指導を行った。

ウ 学習環境づくり（掲示物の工夫）

学びの様子や成果が見える学習環境づくりを校内体制で推進した。本校の研究主題「一人ひとりが主体的に学ぶ生徒の育成～言語活動の充実を通して～」と関連させ、掲示物への工夫を検討した。例えば、行事後にはがき大のミニ新聞を作成し示した。自分の作品を仕上げ、発表し、掲示されることで、生徒は充実感や満足感を抱くとともに、級友の言語感覚や表現力に触れ、よい刺激を受けている。



(3) 学力向上の基盤づくりのための家庭、地域との連携

① 家庭学習の手引きの作成と活用

小中つながりのある学習の充実に向けて、小中連携推進協議会において共通の家庭学習の手引きを作成する必要性について確認した。それを受けて、校内学力向上推進委員会で、検討を重ね、作成に至った。家庭学習の手引きの活用方法については、各授業で生徒に示した。

② 学習支援ボランティアによる質問教室の実施

テスト前、平日の放課後や休日に、地域の学習支援ボランティアを招いて質問教室を開催した。生徒にとっては普段とは違う方から教えてもらえる新鮮さがあり、生徒の学習意欲の向上につながっている。



③ 体験活動の充実

地域の様々な行事の準備や運営に、全校生徒を対象にボランティアを募った。生徒は地域に出て、多くの方々と積極的に交流し、学校内では得ることができない貴重な経験をした。生徒たちは様々な年代の方と接する中で、多様な考えや価値観に触れながら、たくましさを増しており、豊かな心の育成という点で効果が見られた。これまでに参加した活動には下記のようなものがある。

○友田川周辺草刈作業 ○安岡地区運動会・文化祭 ○安岡ふるさと祭り ○地域合同餅つき大会

○安岡地区防火訓練

○駅での自転車点検

○地域スポーツ交流会 等



3. 調査研究の成果の把握・検証

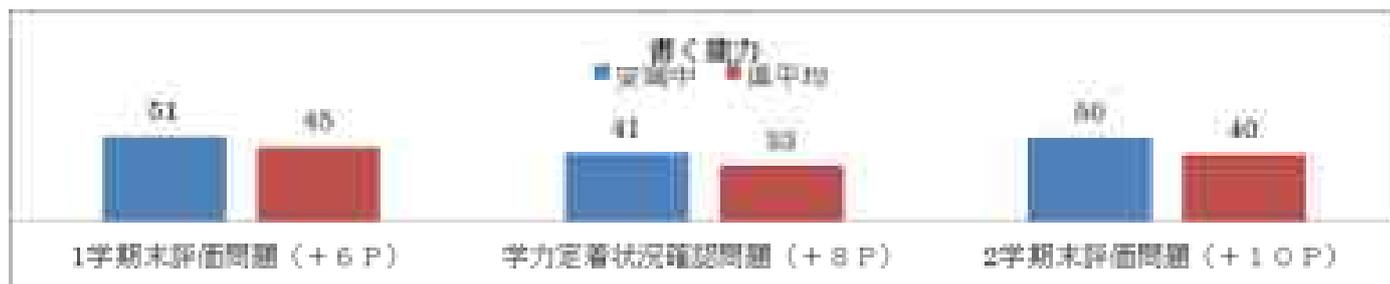
(1) 「やまぐち学習支援プログラム・学期末評価問題（1学期末と2学期末）」と「山口県学力定着状況確認問題（10月）」の比較分析から見られる取組の成果

① 1年国語科「書く能力」・「言語についての知識・理解・技能」における取組の成果

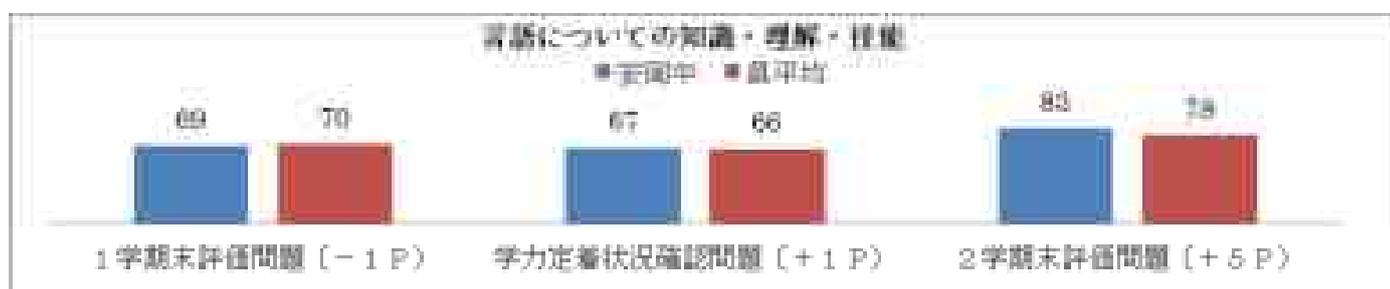
1年の国語科では、毎時間、授業の終末で120字分のマス目付き原稿用紙を生徒全員に配布し、生徒は自分の言葉で授業内容を振り返り、120字以内で文章表現する。生徒は、その時間に学んだ内容や授業後の感想をまとめ、教員は、誤字脱字、表現方法などについて加筆訂正を行い、次の授業で生徒に返却する。

こうした取組の結果、生徒は120字でどのくらいの内容が書き込めるかという感覚をつかみ、文字を使って表現することへの抵抗感がかなり低くなった様子を感じとれた。また、その日の振り返り用紙をノートに貼っておくことで、後日、復習するときに授業時の理解度や感想が鮮明に蘇るので、生徒にとって貴重な資料となっており、改めて「書くこと」の大切さが認識できる。

次ページのグラフは「書く能力」（1年生）についての本校の平均正答率と山口県の平均正答率を表したものである。このグラフでは山口県の平均正答率との差を少しずつ広げてきており、取組の効果の一端がうかがえる。山口県学力定着状況確認問題においては、「書く能力」に関する全ての問題で山口県の平均正答率を上回った。

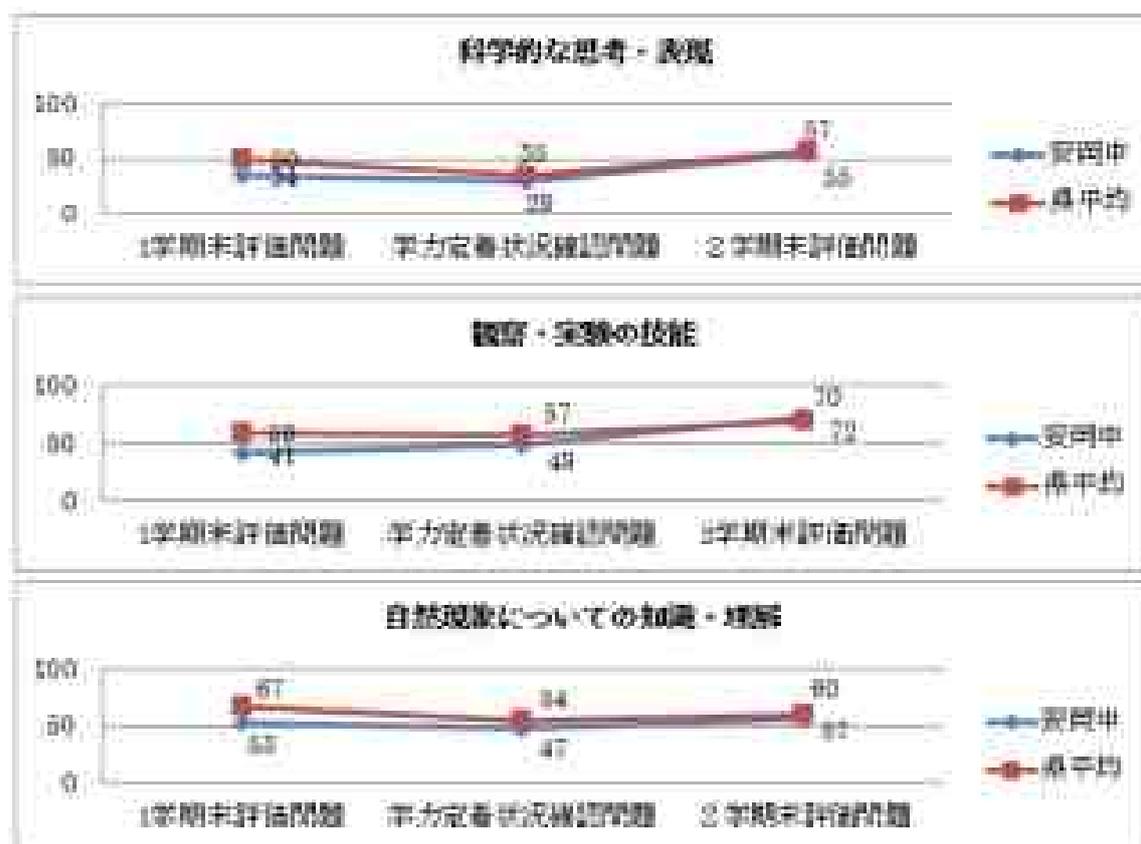


1年国語科における「言語についての知識・理解・技能」では、「やまぐち学習支援プログラム・基本問題」を積極的に活用した。特に、小学校中学年の問題に遡り、言語に関する基本的な問題から取り組んできたことが、どの生徒にも抵抗なく、語彙力を付け、言語感覚を高めることにつながったと考えられる。



② 2年理科「科学的な思考・表現」「観察・実験の技能」「自然現象についての知識・理解」における取組の成果

2年理科では、全ての観点で本校の平均正答率は山口県平均よりも下回っていたが、着実にその差を縮め、「観察実験の技能」において、2学期末評価問題で山口県平均を上回った。理科においては「やまぐち学習支援プログラム・やまぐちっ子活用プリント」を朝学習や授業で積極的に活用した。



「自然現象についての知識・理解」を図る「肺循環」「体循環」を答える問題では、山口県平均正答率45%に対して本校では63%の正答率であった。この授業では、教員が授業で説明した後に、複数のキーワードを用いて生徒が説明する活動を個人・グループ・全体という流れで仕組み、生徒が何度も反復練習できる機会や、友達の発表を聞いて修正できる機会を与えた。また、キーワードを数多く使うほど得点を高くするというルールを設けたことにより、どの生徒も意欲的に取り組み、その結果、知識・理解が深まったと考えられる。

③ 成果の見られた取組のまとめ

○基礎的・基本的な知識・技能の向上に向けての効果的な取組

- ・ドリル学習 ・前学年の復習 ・ノート整理 ・重要語句の確認 ・単語や熟語の確認（英語科）
- ・ワークシートや小テストの活用 ・ノートやワークを使った復習 ・語順プリント ・単元テストや連語の復習

○思考力・判断力・表現力の向上に向けての効果的な取組

- ・与えられた字数内での自己表現 ・調べ学習 ・キーワードを基にした説明およびまとめ ・レポートづくり
- ・新出文型を用いての自由作文 ・資料の読み取り ・活動や作業を取り入れた授業づくり

○授業づくりに向けての効果的な取組

- ・「めあて」の提示 ・授業規律の確立 ・思考過程を重視した授業づくり
- ・スモールステップを捉えた問題提示の工夫 ・資料やデータの効果的な活用 ・授業評価の工夫、改善

(2) 学習習慣に関する調査による成果

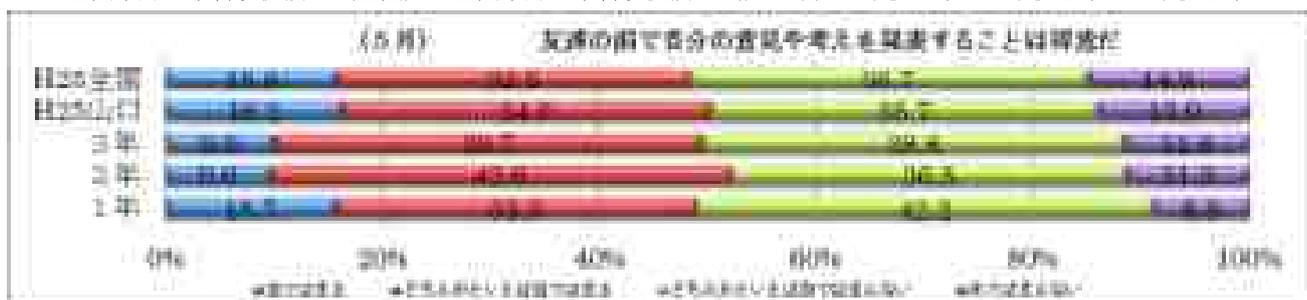
「全国学力・学習状況調査」の生徒質問紙を活用し、5月（全国、山口県、本校3年は4月の全国調査）及び11月に同じ項目のアンケートを全学年で実施した。

① 自分の行動や発言に自信を持っている生徒の増加

5月と比較し、11月の調査では「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」と答えた生徒が2・3年生で増加した。授業改善による言語活動の充実、ボランティア活動への参加による様々な体験活動が生徒の自信につながったのではないかと考えられる。

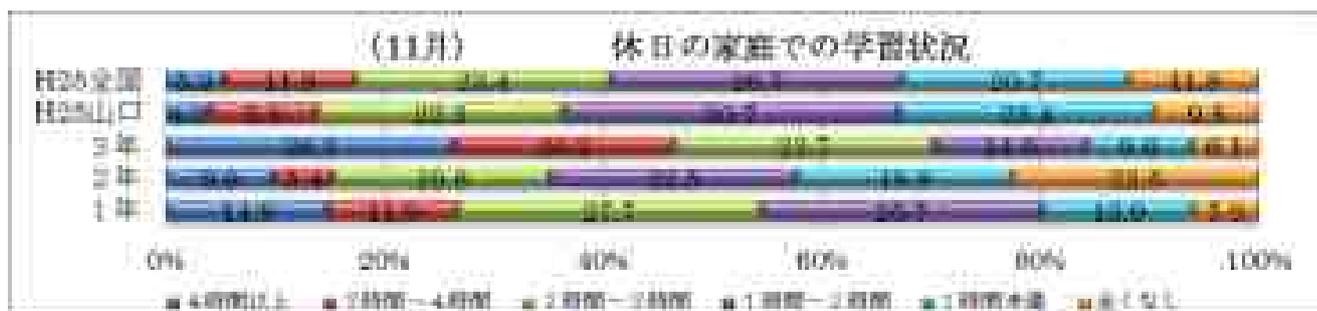
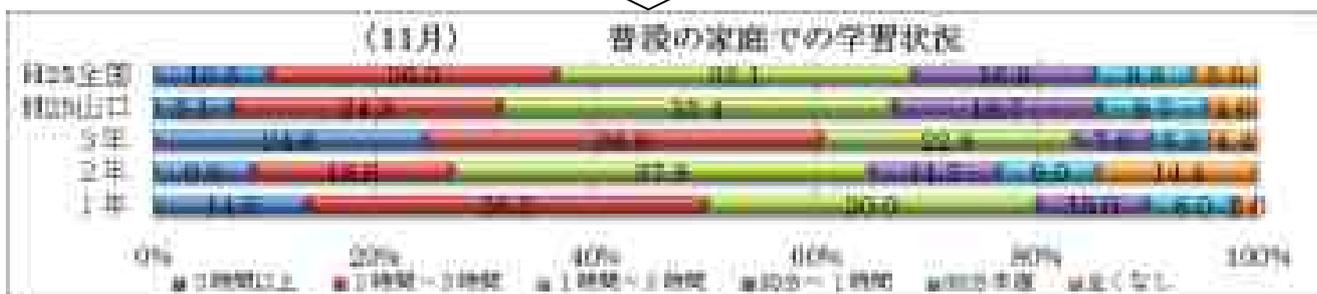
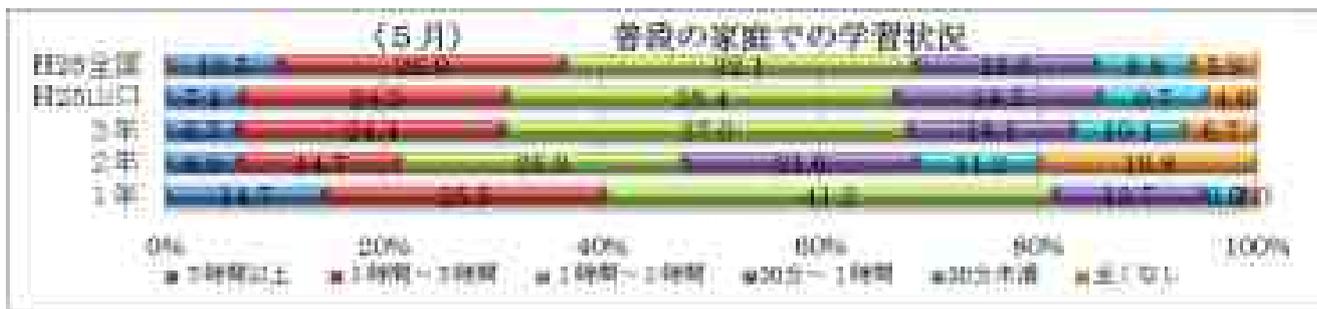
※以下のグラフはすべて上から、

全国学力・学習状況調査（全国）・全国学力・学習状況調査（山口県）・本校3年 ・本校2年 ・本校1年



① 家庭での学習状況に関する変化

普段や休日で「全く勉強しない」という生徒の割合は、全ての学年において減少した。今後も「家庭学習の手引き」を生徒が積極的に活用し、家庭での学習習慣の確立のための一助となるよう、改善を重ねていきたいと考えている。



4. 今後に向けて

小中連携教育の推進、校内研修の活性化、家庭・地域との連携強化を基軸として、生徒の実態から見えてくる学力課題の解決に向け、教職員一丸となって取り組んできた。小中（教員・生徒）の授業交流の活性化、義務教育9年間を見通した学力向上プランと学習の手引きの作成、授業改善の促進、学習環境の整備、そして「やまぐち学習支援プログラム」の積極的な活用などを通して、多くの教科で学習成果を上げた。

しかし、全国平均、県平均との比較から、本校が今後取り組まなければならない課題は決して少なくはない。本校生徒の実態から今後の重点課題の一つとして、「生徒が夢を抱き、それを実現させるための学習意欲の喚起」が挙げられる。学習の主体である生徒自身の学習意欲をいかに高めていくかということ視野に入れ、今後は今年度の取組の継続的な改善を図るとともに、「キャリア教育の充実」に視点をあてた新たな取組を考えていきたい。